

Ⅱ 海外オーケストラに関する調査 —教育／地域プログラムを中心に—



A. 英国

1. ロンドン交響楽団 | London Symphony Orchestra
2. BBC 交響楽団 | BBC Symphony Orchestra
3. バーミンガム市交響楽団 | City of Birmingham Symphony Orchestra
4. アーツカウンシル・イングランド | Arts Council England

写真: ロンドン交響楽団の教育/地域プログラムの拠点 St. Luke's (18世紀の教会 Hawksmoor church を改修して2003年3月オープン)

現地調査協力: 印南美沙子 (オックスフォード大学東洋学研究所)

1英ポンド=150円で換算

本文中は敬称を省略

1. ロンドン交響楽団 | London Symphony Orchestra

面会日:2013年1月31日(木)

面会者:Eleanor Gussman (Head of LSO Discovery)

1. オーケストラの概要

ロンドン交響楽団(London Symphony Orchestra、以下 LSO)は1904年の創設以来、世界を代表するオーケストラの一つである。楽団員たちはオーケストラの仕事だけではなく、ソロや室内楽、教育活動まで多岐にわたって活躍している。

LSO はロンドン中心街に立地するバービカン・センター(Barbican Centre)のレジデント・オーケストラであり、そこで行われる年間70回以上のコンサートに加えて、海外ツアーでも70回の演奏会もこなしている。さらにニューヨーク、パリなど、海外の主要コンサート・ホールのレジデント・オーケストラであるほか、日本や東アジアでも定期的に演奏会が行われている。LSO は映画音楽などでもよく知られているオーケストラである。

演奏会活動以外でも、教育/地域プログラムの分野で先駆的役割を果たしている。あらゆる社会的・文化的バックグラウンドや年齢層を越えて音楽を提供する LSO Discovery は、LSO St. Luke's (18世紀の教会 Hawksmoor church を改修して2003年3月オープン)を本拠地とし、毎年6万人を超える人々に LSO の音楽を届けている。LSO Discovery は、同楽団の、質の高い音楽をできる限り多くの人々に届けるというミッションを実現する点でも大きな役割を担っている。また LSO St. Luke's では、BBC ラジオやテレビ、バービカン・センターやギルドホール音楽演劇学校(Guildhall School of Music and Drama)とも提携して、多様な教育プログラムを展開している。

また LSO Live という独自のレーベルを通じて、LSO の演奏は世界のあらゆる観客に届けられている。このレーベルは CD などのプロデュースにとどまらず、インターネット経由で演奏をダウンロード可能な状態にすることで、新しい観客にクラシック音楽を提供することにも一役買っている。

LSO の年間予算は1,700万ポンド(2億6,000万円相当)で、約4分の1が公的な資金(15%がアーツカウンシル、13%がロンドン市)によって賄われている。

LSO のオフィスは委員会を除くと約80名程度で構成され、経理、資金調達、企画・制作(planning)、教育プ

ログラム(LSO Discovery)、マーケティング、PR、LSO Live(CD制作等)のセクションに分かれて運営されている。

2. 教育/地域プログラム: LSO Discovery

(1) 教育/地域プログラム実施の経緯と目的

LSO の教育/地域活動の中心的プログラムである LSO Discovery は常に音楽家によって率いられ、2010年に20周年を迎えた。元々は、当時ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団(London Philharmonic Orchestra)に所属し、マネジメント面でも有能だった音楽家・音楽教師の Richard McNicol の主導で始まったものである。Discovery Program の基本的なモットーは、観客が音楽をただ聴くだけではなく、いわばステージに上がって(楽団員と一緒に)音楽に“参加”することにある。観客との新たな関係構築を模索しようというものである。ちなみに LSO 教育プログラムの拠点となる LSO St. Luke's が開設されて今年でちょうど10年になる。LSO St. Luke's という場を持つことによって、地域とより密接な関係を築けるようになった。

さらに近年では、LSO Discovery は国際的にも展開しており、プログラムの中には LSO の海外ツアーに組み込まれているものもある。Aix-en-Provence Festival などの国際フェスティバルに参加し、マルセイユ市民80人が参加するコミュニティ・オペラを上演したり、ユース・オーケストラやジュニア・オーケストラ(地元のあらゆる年齢・音楽経験をもつ125人の子どもたちが参加)の指導、5~7歳の子どもに音楽に親しんでもらうための音楽探検プログラム、ブログを展開するなど、活動は海外でも多岐にわたる。

(2) 教育/地域プログラムの構成と内容

LSO の主要な教育/地域プログラムは、①学校向け、②地域向け、③音楽家の育成、④On Track(ロンドン・オリンピック関連のプログラム)、⑤デジタル・プログラムの5つに分類できる。ホームページに概要が掲載されているものだけで、プログラムの数は30にものぼる。

ここでは一覧表に整理し、ホームページに掲載された情報に基づいて、各プログラムの概要を整理した。



LSO の教育/地域プログラムの拠点 St. Luke's

① 学校向けプログラム (For Schools and Teachers)

Discovery の中心は学校向けプログラムで、年間60回を数える学校向けコンサートを行い、2万4,000人の生徒にLSOの音楽を届けている。対象は次の5グループに分けられ、すべての児童・生徒が対象となっている。

- Key Stage 1: 5～7歳 (初等教育)
 - Key Stage 2: 8～11歳 (〃)
 - Key Stage 3: 12～14歳 (中等教育)
 - Key Stage 4 (GCSE): 15～16歳 (〃)
 - Key Stage 5 (A-level): 17～18歳 (高等教育)
- 個別プロジェクトやコンサート、ワークショップ等の音

LSO の教育/地域プログラム (DISCOVERY) 一覧

分 野		プログラム名と概要
① 学校向けプログラム		● Primary Key Stage Concerts: 5～11歳の子どもたちを対象にしたバービカンでのコンサート ● Secondary School Events: 中等教育から大学入学前までの生徒たちを対象にしたプログラム ● Workshops: リスニングやアレンジ、グループでの作曲・即興などを行うワークショップ
② 地域向けプログラム	家族・子ども向け	● Family Concerts: バービカンでの家族向けのコンサート (年3回、特に7～12歳の子ども向き) ● Music Explorers: 土曜午前に St. Luke's で行われる8歳以下の子ども・家族向けワークショップ ● Concerts for Under 5s: 5歳以下の子どもたちを対象としたコンサート (読み聞かせなどあり) ● Early Years Workshops: 5歳以下の子どものための45分のインタラクティブなワークショップ
	生涯学習プログラム	● Friday Lunchtime Concerts: 毎週金曜に St. Luke's で行われる45分程度の無料コンサート ● Discovery Days: 特定の作曲家の生涯や音楽を深く探求するプログラム ● Open rehearsals and workshops: LSO のオープン・リハーサル、インターネット経由の参加も可 ● Singing Days: 16歳以上の誰もが参加できる合唱のワークショップ ● Not(e) Perfect Orchestra: 1日オケの一員となって LSO の楽団員との演奏を体験 (18歳以上)
	定期的活動	● Community Choir: 東ロンドンの住民が参加できる聖歌隊 (毎週月曜にリハーサル) ● Youth Choir: 7歳以上の若者たちを対象にしたコーラス (毎週月曜 St. Luke's で練習) ● Gamelan Group: 年齢、障がいの有無に関係なく誰もが参加可能なガムラン音楽のグループ ● Fusion Orchestra: 11～18歳の若手演奏家向けのプログラム (休暇中の LSO の楽団員が参加) ● Digital Technology Group: 13～20歳の青少年を対象にした PC や楽器、声を使うプログラム ● LSO Create: 毎月第一月曜に、St. Luke's で行われる学習障がいのある大人向けのプログラム
③ 若手音楽家の育成		● LSO Academy: 14～24歳の才能のある器楽演奏者を対象にした1週間のマスタークラス ● LSO Discovery Conducting Scheme: 毎年3名の若い指揮者を LSO の指揮者が指導 ● Panufnik Young Composers Scheme: 毎年6名の作曲家にオーケストラ曲の作曲機会を提供 ● String Experience Scheme: 若手演奏家に LSO のエキストラとして、リハーサルやコンサートへの参加の機会を提供 (弦部門20ポジションを用意) ● LSO Soundhub: 現役作曲家の指導で若い作曲家に実験的な音楽を探求できる機会を提供 ● Centre for the Orchestra: 若い音楽家を育成し、音楽家としてのキャリアアップ、プロになるためのサポート等を提供 (LSO、バービカン、ギルドホールとの連携プログラム) ● Instrumental Bursary Scheme: 11歳以上の若者を対象にした音楽教育のプログラム
④ LSO On Track (2007年に立ち上げられたロンドン・オリンピック関連のプロジェクト)		● Olympic Opening Ceremony: オリンピックのオープニング・セレモニーで演奏を披露 ● Activities for Young Musicians: On Track を通じて、東ロンドンの若い音楽家を育成 ● CPD for Primary Teachers: 東ロンドンの学校の教師を対象にしたプログラム ● Activities for Schools: Key Stage 1から5の学校を対象にコンサートやワークショップを提供 (東ロンドンでは特殊学級を対象に実施)
⑤ デジタル・プログラム		● オンラインでマスタークラスやトーク、LSO の演奏などの視聴が可能、今後さらに強化予定

資料: LSO ホームページ掲載情報などに基づいて作成

楽教育を届けることを目的としており、Primary Key Stage Concerts、Secondary School Events、Workshops などの例があげられる。

これらの3種類のプログラム、ワークショップはいずれも予約制となっているが、幼少の子どもから大学進学前の生徒まで、どの年齢層の子どもたちもそれぞれの年齢層にあわせた音楽教育を受けられるようにプログラムされている点が注目できる。多様な機会を設けて子どもたちにアクセスすることで、音楽は生活と密接に関係するものだという意識を子どもに持たせることが重視されている。

○ Primary Key Stage Concerts

これは Key Stage 1と2の子どもたち(初等教育)を対象とした、バービカン・センターで行われるコンサートである。それぞれ LSO をフィーチャーし、LSO のアニマトゥール¹がコーディネートする。プログラムには LSO のレパートリーやこのコンサートのために作曲された参加型の歌などが含まれる。

通常、コンサートの6週間ほど前に、参加校の先生のための準備的なセッションが行われる。コンサートの中で歌う曲を子どもたちに上手く簡単に教える方法をはじめ、クラスルーム・プロジェクト(教室で行う活動)やコンサートに参加するために先生が準備すべきことなどが紹介される。先生はクラスルーム・プロジェクトに関する資料一式や曲中の歌の録音なども受け取り、子どもたちがコンサートに参加できるように準備する。

○ Secondary School Events

中等教育から大学入学前までの生徒たち(Key Stage 3から4)を対象としたプログラム。LSO の演奏するハイドンやマーラーなどの交響曲から1楽章を取り上げ、LSO のアニマトゥールに率いられる形で、楽曲スタイル、作曲家と音楽の歴史や文化的背景などを含めて音楽を読み解いていく。

Guided Concert Nights というイベントでは、曲にまつわる話を学んだ上で、夜のコンサートに参加する機会

が与えられる。中等教育の生徒を対象としたプレ・コンサート・ワークショップも LSO のアニマトゥールに率いられ、コンサートで聴くレパートリーの紹介によって生徒は音楽への理解を深めることができる。さらにワークショップで抜粋曲を演奏する LSO の楽団員とも面会し、楽団員の生活の様子などを聞くことも可能。ワークショップは1時間程度で、本コンサートの開演30分前には終了する。

A-level Seminar という音楽科目を受験する生徒向けのセミナー(ホーン、トランペット、トロンボーンのためのプーランクのソナタなど、実際に A-level で課されるものの)のビデオは、オンラインで視聴できるようになっている。

○ Workshops

Music Technology Workshops には Remix the Orchestra と Audioactive の2種類がある。前者は LSO のカタログからサンプルを使って、新しい曲を作曲するもので、リスニングとアレンジに焦点が当てられ、Key Stage 2から A-level の生徒向けとされている。後者は、音楽技術の学習やアコースティック楽器を使ってグループでの作曲、即興、そして演奏を行う。Key Stage 3と4の生徒向け。また東南アジアの伝統的な打楽器のワークショップ Balinese Gamelan Workshops というのもあり、これは Key Stage 1から5の幅広い年齢層を対象にしている。

② 地域向けプログラム-1: 家族・子ども向けプログラム (For Families and Children)

家族・子ども向けプログラムも、学校向けプログラム同様、子どもの年齢に適した音楽活動を盛り込んだ年齢別のプログラムとなっている。

コミュニティでの活動は、お年寄りや身障者など含めてあらゆる人々と音楽を共有することを目指している。その中には、St. Luke's でのランチタイム・コンサートや、10週間にわたる月曜朝のラーニング・プログラムから、外部で行われるアウトリーチなどが含まれている。St. Luke's の観客は、地元の人々や、ケア・ホームから車椅子などで参加する人々など様々である。

アウトリーチは、外部のコミュニティ・センターなどで、

¹ アニマトゥール(Animateur: 仏)は、推進者、主導者という意味。英国では教育/地域プログラムでのプログラムの進行役を「アニマトゥール」と呼称する事例が増えている。



Music for Explore でガムラン楽器と遊ぶ幼児 © LSO

親子と一緒に音楽を楽しむ機会を提供するもので、バービカン、St. Luke's 周辺1マイルのコミュニティを中心に行われている。First Monday Club という月1回の身障者のためのプログラムは、一緒に訪れるヘルパーにも一緒に音楽を楽しんでももらえるようになっている。これらの活動は長期間行われるため、参加者には技術の面でもクリエイティビティの面でもプラスとなり、コミュニケーション・スキルの向上にもつながっている。

最近各プログラムへの応募が殺到し、抽選で参加者を決めるようになっており、LSO では、できるだけ平等に参加の機会が与えられるように心がけている。

ここでは、地域向けプログラムを、LSO のホームページに掲載された情報に従って、家族・子ども向け、生涯学習、定期的な活動の3つに分けて、概要を紹介する。

○ Family Concerts

1学期に1回、年に3回、バービカンで開催される家族向けのコンサートで、特に7歳から12歳の子どもに適した内容となっている。アニメトゥールが率いるコンサートは特定のテーマに基づいて構成され、子どもたちは楽器や歌でコンサートに参加する機会が与えられる。通常は、マチネ・コンサート当日の午前中にワークショップがあり、LSO 楽団員とともに参加型の曲を練習

する。幼少児には保育所も用意される。コンサートのチケットは16歳以下の子どもは5ポンド、大人は10ポンド。

○ Music Explorers

土曜日午前中に企画される、8歳以下の子どもと家族向けのワークショップ。St. Luke's で行われ、LSO 楽団員とともにあらゆる楽器やガムランなどの演奏にトライし、ワークショップの最後に行われるコンサートのための小道具なども作る。参加費は子どもが3ポンド、大人が5ポンド、12ヶ月以下の乳幼児は無料となっている。

○ Concerts for Under 5s

5歳以下の子どもたちを対象としたコンサートで、Storytelling Concerts は物語の読み聞かせやミュージカルの要素を含み、きりんや熊などの動物が出てきたり魔法があつたりなどアトラクションが盛り沢山の内容となっている。これは保育園や遊び仲間と家族の2グループに分けて行われる。参加費は前者が1人2ポンド、後者は1人3ポンド。

○ Early Years Workshops

5歳以下の子どもたちのための45分のワークショップ。St. Luke's で行われ、Shake, Rattle and Roll というワークショップは大人も子どもも一緒に音を奏で、聴き、歌い、楽しむインタラクティブなセッションとなっている。年齢に



基づいて1グループ15人以下のグループに分けられるため、1人1人が十分に参加し、他の子どもとも交流できるようになっている。1学期10週間にわたって実施。

③ 地域向けプログラム-2: 生涯学習プログラム (Lifelong learning)

何歳でもどんなバックグラウンドを持った人にも音楽を学ぶ機会を提供しようとするものである。LSO の Web サイトでは「1歳でも100才でも、LSO Discovery は音楽の学びをお手伝いします。音楽教育は子どもたちだけのものではありません」と謳われている。

以下に列記したものの他にも、バービカンで行われる LSO コンサート前には、無料の Pre-concert Talks がしばしば開かれ、作曲家や曲の解説から作曲家の仕事やソリストのスケジュールなどの話を聞くことができる。

○ Friday Lunchtime Concerts

金曜日に St. Luke's で行われる Friday Lunchtime Concerts は無料で、LSO の楽団員とギルドホールの学生によって演奏される。曲や楽器の解説、Q&A も含まれている。コンサートは45分程度で予約の必要はなく、St. Luke's に気軽に音楽を聴きに行くことができる。

○ LSO Discovery Days

これは特定の作曲家の生涯や音楽を詳しく理解できる機会を提供するもので、モーニング・リハーサル、ゲスト・スピーカーによる作曲家に関するトーク、LSO の楽団員による室内楽演奏と Q&A セッション、最後にバービカンでの夜のコンサートで締めくくられる。これまで、ブリテン、シューベルト、ショスタコーヴィッチ、ハイドン、ジェームス・マクミラン等、あらゆる時代の作曲家が取り上げられた。会場はバービカンと St. Luke's、1日通しのチケットは17ポンドで、3ヶ月に1回程度の頻度で企画されている。

○ Open rehearsals and workshops

St. Luke's やバービカンで行われる LSO のリハーサルの見学が可能のほか、何人かのソリストが LSO 楽団員と共演する Artist Conversation では客席だけではなくインターネット経由でも質問ができる。さらに、Young Talent schemes という英国中の若い才能のあるミュージシャンの参加するプログラムでは、ワークショップやマス

タークラスの見学が可能である。

○ Singing Days

歌うことはしばしば音楽への最初の一步であることから、Singing Days は16歳以上の誰もが合唱に参加できるワークショップとなっている。多少の譜読みは必要となるものの、LSO 合唱部門のディレクター Simon Helsey の指導で、誰でも参加でき、最後は家族や友人などを招待できるインフォーマルなパフォーマンスで締めくくられる。参加費は17ポンド。

○ Not(e) Perfect Orchestra

18歳以上を対象にしたプログラムで、1日オーケストラの一員となって LSO の楽団員とともに演奏し、新しい技術を獲得して、最後はエルガーのニムロッド、ビゼーのカルメン等をフィーチャーしたインフォーマルなコンサートで締めくくられる。これも最後のコンサートは家族や友人の招待が可能。このプログラムでは、特に楽器をしばらく弾いていない、もしくは共演をしたことのない参加者が望ましいとされ、参加費は10ポンド。

④ 地域向けプログラム-3: 定期的活動 (Regular Activities)

○ Community Choir

これは、東ロンドンの郵便番号で EC1 エリアに住む人々に歌うことを楽しんでもらうことを目的としてつくられた聖歌隊である。レパートリーはオペラ、フォークソングなど多岐にわたる。毎週月曜日の6時半から8時半にリハーサルが行われ、3~4ヶ月に1回、St. Luke's で演奏会を行う。LSO のコンサートの一部としてバービカンで演奏することもあり、最近のものではトランペット奏者 Hugh Masekela との共演が BBC4 テレビで放映された。この聖歌隊には EC1 エリアに住む人、または働く人であればオーディションなしで参加できるが、今のところウェイティング・リストがあり、空席待ちの状況。

○ Youth Choir

7歳以上の若者たちを対象にしたコーラス。2004年6月、Gareth Malone によって創設され、数年間活動を行ってきた。これまでにウィンザー城での演奏会やバービカンでの LSO との共演、St. Luke's コミュニティ・コーラスや LSO の演奏家との共演で Edward Rushton のオラトリ



LSO Academy © LSO

オの初演などを行ってきた。音楽監督は Lee Reynolds で、練習は毎週月曜日、St. Luke's で行われている。

○ Gamelan Group

大人たちを対象にしたガムラン楽団。St. Luke's に専用の部屋があり、ワークショップや地域の学校へのアウトリーチ活動なども行っている。年齢、障がいの有無に関係なく参加可能で、音楽の経験は不問。毎週、月曜の夕刻から初心者向け、中級・上級向けに分けてセッションが行われ、参加費は6ポンド50セント(1,000円相当)。

○ Fusion Orchestra

11～18歳の若手演奏家向けのプログラムで、LSO の楽団員が、参加者とともに休暇中に、音楽の探究や即興演奏、新しい音楽作りなどを行う。参加無料。

○ Digital Technology Group

13～20歳の青少年を対象にしたプログラムで、PC や楽器、声を使った曲づくりのワークショップを行い、最後には演奏を行う。参加者は、様々な音楽ソフトがインストールされたマック10台や電子楽器を備えた Candido Discovery Room において、クラシックだけでなくロックやヒップホップなどあらゆるタイプの音楽を創作する。活動は毎週月曜、午後4時～7時、参加費は無料。

○ LSO Create

毎月第一月曜日に、St. Luke's で行われる学習障がいのある大人向けのプログラム。参加者は LSO の演奏者に会って、演奏を聴いたり、音楽を作ったり楽器を演奏したりできる。参加無料。

③ 若手音楽家の育成 (Artist Development)

○ 若手演奏家向けプログラム (For Young Musicians)

LSO は次世代の若い音楽家(演奏家、指揮者、作曲家)のために、マスタークラス、ワークショップ、インテンシブ・コーチング(短期集中指導)、オーケストラとの共演など、様々な機会を提供している。

○ LSO Academy

毎年開かれる LSO Academy では、14～24歳の選抜された才能のある器楽演奏者を対象に、St. Luke's において1週間のマスタークラスやオーケストラのワークショップなど、LSO の楽団員とともに学ぶ機会が提供されている。すべての学生は無料で参加可能。2012年はブラス部門のホーン、トランペット、トロンボーン、チューバなど、2013年はティンパニーとパーカッション、2014年は弦、2015年は木管、2016年はブラス、2017年はティンパニーとパーカッションという具合に、毎年オーケストラの違うパートがカバーされるようになっている。

○ LSO Discovery Conducting Scheme

これは、毎年3名の若い指揮者を選抜し、LSO の指揮者の指導のもとオーケストラと一緒に訓練できる機会を提供しようというもの。3人の参加者が、3時間にわたるオーケストラセッションの3分の1ずつを担当して指揮する。2013年のマスタークラスではゲスト指揮者にマイケル・ティルソン・トーマスを招き、ブリテンの『青少年のための管弦楽入門』、ショスタコーヴィッチの『シンフォニー第5番』などのレパートリーを演奏した。

○ Panufnik Young Composers Scheme

毎年6名の作曲家にオーケストラ曲を作曲する機会を提供するプログラム。指揮者であった Andrzej Panufnik 卿に因んだもので、Helen Hamlyn Trust の助成を受けて運営されている。Colin Matthews の指導のもと、若い作曲家は時間をかけて実験を繰り返しながら作曲するスキルを習得する。LSO とのコラボレーション



が可能で、自らが作曲した曲(3分程度)は公開のワークショップで LSO によって演奏される。そのうち1人の作曲家には、さらに長い曲(10分程度)の作曲が委嘱され、その曲はバービカンで演奏されることになっている。

○ String Experience Scheme

1992年に始まったこのプログラムは、若い音楽家にエキストラとしてオーケストラのリハーサルやコンサートに参加する機会を提供するもので、弦部門で毎年約20ポジションが用意されている。これは、まだ音楽学校に通う若い音楽家に対して、プロへの最初の一步ともなる実地の経験を与えるものである。

○ LSO Soundhub

LSO Soundhub では、若い作曲家に LSO の楽団員や関連業界のプロと関わりながら、実験的な音楽を探求できる機会が与えられる。作曲家たちのニーズに直接応えられるよう、作曲家自身が指導するこのプログラムでは、作曲家は新しいアイデアを試し、仲間とのネットワークやサポートを活かして曲をさらに発展させることができる。英国内の作曲家も参加可能で、前述の Panufnik Young Composers Scheme とともに若い才能へ継続的な投資、機会提供を行おうというものである。最初は6ヶ月間のプログラムだったが、2012年9月には1年間のプログラムが立ち上げられた。

○ Centre for the Orchestra(C4O:Guildhall School and the Barbican Centre との提携プログラム)

これは LSO、バービカン、ギルドホールが連携するプログラムで、若い音楽家を育成し、音楽家としてのキャリアアップ、プロになるためのサポート等を提供することを目指している。とりわけ、21世紀のオーケストラ、作曲家と聴衆の総合的な育成を視野に、ギルドホールで学ぶ音楽家のためのオーケストラのトレーニング、教育、キャリアアップのためのサポート等を提供している。内容は、マスタークラス、若手向けのトレーニングとアドバイス、LSO の楽団員とともに行う東ロンドンの若者との共同作業、室内楽演奏のスキルアップ、デジタル・プラ

ットフォームの紹介、ビジュアル・アートとのジャンルを越えたコラボレーション、リサーチ・プロジェクトなど、かなり充実している。

○ Instrumental Bursary Scheme(才能のある若手弦楽器奏者向け育成プログラム)

Sir Clive Gillinson Instrumental Bursary Scheme は、ロンドンのイズリントン、ハクニーに住む11歳以上、ABRSM グレード5²以上の若者を対象にした音楽教育の発展を目的としたプログラム。毎年公募が行われ、LSO Discovery を中心に若者のニーズに合ったプログラムの組み合わせが提供される。メンターとして割り当てられた LSO の楽団員から指導を受けられるほか、個別もしくは集団での指導時間が与えられる。LSO のリハーサル、コンサート、イベントへの参加も可能である。

④ LSO On Track

これはロンドン・オリンピックの関連プロジェクトとして、2007年に立ち上げられたもので、どんなバックグラウンドがあっても、可能性を最大に活かせば誰もがトップに到達できる、と若者をインスパイアすることが狙いとなっている。東ロンドンの10の自治区(borough)のミュージック・サービス、バービカン、ギルドホールと戦略的なパートナーシップを組み、ワークショップや LSO との共演を通してどんなバックグラウンドの子どもや若者にも平等に音楽に触れる機会を提供してきた。演奏技術のレベルに関係なく、子どもたちは誰でも音楽学校の学生や LSO 楽団員とともに参加できる。

² ABRSM(Associate Board of the Royal School of Music)によって提供される音楽の技能テスト



LSO は若手演奏家の育成に力を注いでいる。© LSO

○ Olympic Opening Ceremony

2008年以降、東ロンドンの数千人の若者が参加してきた On Track では、オリンピックのためのオーケストラ(The LSO On Track Olympic Orchestra)を編成し、オープニング・セレモニーで演奏を披露した。4年前に On Track が始まった時は、多くの若者が初心者だったが、LSO 楽団員の指導を受けてスキルを高め、7歳~17歳の東ロンドンの若者たち80名が2012年2月から演奏のための準備に取りかかり、LSO 楽団員とともにエルガーのニムロッド等の楽曲を演奏した。

開会式に集まった6万人の観客、さらに10億人を越えるテレビ視聴者に音楽を届けた。このオーケストラは RPS [Royal Philharmonic Society] Music Award の Learning and Participation 部門にノミネートされた。

○ Activities for Young Musicians

LSO では On Track プログラムを通じて、東ロンドンの若い音楽家をインスパイアする機会を提供している。東ロンドンのパートナーやミュージック・サービスと提携し、LSO の楽団員が音大生とともに、若者への特別委嘱曲を含めた演奏を行い、参加した若者は技能、クリエイティビティ、自信などを高められる。プログラムには弦や吹奏などセクション単位のものも含まれている。

2012年5月にトラファルガー・スクエアで開かれた、ス

トラヴィンスキー「春の祭典」を含む屋外パフォーマンスには1万人の観客が集まった。2013年5月にも同じ場所で Symphonie Fantastique というイベントが企画されている。

集中指導を含むサマーキャンプ、コーチング、リハーサル、パフォーマンスを含めた1日限りの音楽フェスティバル「Pitch Up Orchestra」などもある。

○ CPD for Primary Teachers

東ロンドンの学校の教師が、教室で音楽を扱う自信を高め、手法を学ぶプログラム。LSO のアニメーターや楽団員らによって、身障者等の特殊学級を含む子どもたちを対象にした実用性の高いアイデアなどが提供される。他の先生たちと一緒に演奏したり、あらゆる状況に対応可能なウォームアップ・エクササイズを練習したりするほか、指導技術などを身に付けるなど、参加教師は音楽教育への自信を高めることができる。通常、CDP スキームは3ターム(1年)にわたってプログラミングされており、学校でのプロジェクトや、バービカンもしくは St. Luke's で行われるクリエイティブ・デイ、LSO イベントへの参加等も含まれている。

○ Activities for Schools

LSO では Key Stage 1から5の学校のためのコンサートやワークショップを提供している。また、東ロンドン

の特殊学級を対象に、楽団員とアニマトゥールとのコミュニケーションを通して、クリエイティブな音楽の創造、才能の育成をめざしたコンサートやイベントなどが企画・提供されている。

⑤ デジタル・プログラム

LSO では、聴衆の拡大を目的に、マスタークラスやトーク、LSO の演奏など、オンラインで LSO 関連の音楽やプログラムが視聴可能となっている。また演奏前のプレ・トーク等にもインターネットでアクセスできる。今後、アーツカウンシルの協力を得ながら、できれば3年間で600万ポンド(9,000万円相当)をオンライン・プログラムに投資し、より多くの演奏をライブなエネルギーが伝わる形で提供できるよう強化したいと考えている。

(3) 教育/地域プログラムの効果と評価

① 教育/地域プログラム自体の効果と評価

教育/地域プログラムの拠点として2003年に St. Luke's を開設して以降、LSO は Discovery の予算を大幅に増大させている。具体的には、1999/2000年のシーズンの支出額は23万3,000ポンド(4,500万円相当)であったが、2009/10年シーズンには100万ポンド(1億5,000万円)となり、この間に教育/地域プログラムは大きく発展したことが分かる。

評価に関しては、パートナーを含めて外部からの客観的なコメントを集め、パートナーと協同で仕事することの利点や、若手音楽家がLSOの楽団員と共演することの社会的インパクト、参加者の技術面での発展などを調べている。

2012年から3年にわたって政府からの助成金が段階的に削減されるため、LSO では Discovery Project の見直しを行い、今後はより充実した楽団内外でのトレーニング、政府の政策であるシンギング・ストラテジー(各地域で歌う機会を定期的により作り、楽器演奏のスキル向上の機会も得られるようにする)に則った展開を考えている。特に貧困地域での若者やコミュニティの合唱団、オンライン・ラーニングやさらに充実したオンライン放送など、デジタル面に力を入れていく模様である。

② オーケストラの経営や楽団員に与える効果

LSO Discovery はそもそも、楽団員のコンサート以外

の音楽活動も発展させたいという狙いで始まったものだが、実際に楽団員はこの LSO Discovery にインスパイアされて、観客とより密接な関係を築き、音楽を通して積極的に社会と関わるようになっていく。その意味で St. Luke's や Discovery は LSO 内の文化自体を根本的に変えたと言える。

映画音楽の収録などが盛んだった時期を経て、今はオーケストラ全体がコミュニティ活動の必要性を実感し、観客とのインタラクティブな関係を築くことにより一層努力するようになった。楽団員が教育プログラムに参加し始める良いきっかけとなったのが、2006年に実施したマルチアビリティ・プロジェクトである。これは、比較的普段のオーケストラ活動に近いものの、あらゆるレベルの演奏技能を持つ人々と作業するプロジェクトだった。

(4) 2012-2014年の教育/地域プログラムの戦略

LSO の今後の教育/地域プログラムの方向性について、面会したグスマン氏が作成した「LSO Discovery 2012-14」を以下に抜粋、要約した。

① 戦略的背景

2011年に英国政府は音楽教育のためのナショナル・プランを発表した。そこでは、5歳から18歳の子どもが歌い、楽器の演奏を学び、それらのスキルを段階的に発展させて、アンサンブルでの演奏に参加できる機会を提供することを目指している。そのための財源は政府から向こう3年にわたって支給されることになっており、初年度の8,250万ポンド(130億円相当)から、7,750万ポンド(2012年)、6,300万ポンド(2013年)、5,800万ポンド(2014年)と毎年段階的に引き下げられる予定である。

そのため、LSO Discovery ではプログラムの成果等を確認し、効果的なプログラム運営を目指していく。ミュージック・ハブ(学校に専門的な音楽教育を提供する機関、詳細は「4. アーツカウンシル・イングランド」、p. 97~100を参照)の設立により、外部との効果的なパートナーシップを組んで LSO On Track など地域での活動をさらに充実させていく計画である。

② 課題と可能性

教育とプロフェッショナルな芸術を結ぶ LSO

Discovery には、音楽家の専門性や積極的な取り組み、ブランド、LSO St. Luke's という場所、さらにデジタル技術のノウハウやパートナーシップとしての活動など、あらゆる強みがある。質の高い事業運営や教育プログラムでのプロの演奏、学校の教師や障がいを持つ子どもたち、音楽的才能に恵まれた子どもたちなど、様々なグループと活動するための知識など、あらゆる面で力を発揮することが可能である。

しかし、Key Stage 間の教育を段階的に発展させる方法、子どもたちとの接し方、将来の観客づくりや良い実例のシェアなど、様々な課題もある。また教育とプロの領域からの需要を満たすには、音楽教育の専門家やトレーニングなどがより一層必要である。

③ 基本理念 (LSO Discovery Vision)

「最良の音楽をできる限り多くの人々に提供する」という LSO のミッションを実現すべく、LSO Discovery は人々が魅力的な LSO の音楽世界への入り口となる。どんな年齢層も受け入れ、世界でも最良のオーケストラの音楽づくりに参加してもらおう。LSO Discovery は、とりわけ新しいコネクションをつくり、人生が変わるような経験を提供し、感動的な音楽をともに生み出すことをめざしている。

④ 新たな戦略の5つの柱

- Home - LSO St. Luke's という場所・ホームを最大限に活かして、アーティストや教師、運営者など音楽教育に携わる人々のスキルアップを図り、Discovery Family と呼べるようなコミュニティを作る。
- Inspire - 人をインスパイアする(刺激し元気づける)ようなライブコンサートの経験をできるだけ多くの人々に届けるため、参加型公演を積極的に提供する。
- Progress - 様々なバックグラウンドをもつ人々が音楽スキルや経験をどのように高められるかがわかるよう、独自のワクワクするプロジェクトを展開する。
- 教育とプロのセクターをつなぐことで、才能のある若者や新進のプロたちのキャリアを磨き、LSO の楽団員を育成する。
- Share - 海外を含む教育・文化セクターとともに未来の優れた実践例を検討するフォーラムを設置す

る。個々の取り組みを振り返り、さらなる学びを提供する場を設ける。

⑤ 期待される効果やインパクト

- Home - より有能なアニマトゥールの育成、演奏家の専門性の向上、トレーニングを受けられる人数の増大、より良いプログラムづくり
- Inspire - カリキュラムを越えた学び、LSO プログラムの連携、新しいレパートリーの試験的演奏や模索、音楽を楽しむグループへのさらなる働きかけなど
- Progress - 政府の要求を満たし、合唱などのスキル向上を図る一方、イズリントンなど恵まれないエリアへのサポート、UK 内の楽器演奏者へのアクセスが得られる
- Excel(卓越) - LSO の音楽教育における指導的役割のさらなる向上、若手音楽家のためのコミュニティづくり、LSO の未来像や安全な音楽環境の提供など
- Share - オンラインのラーニング・コミュニティづくり、新たな音楽教育のモデルづくりのリーダー的ポジションの獲得、無駄を省いたさらなるサポートなど

(5) 教育/地域プログラムの運営

① 運営体制

LSO Discovery は LSO の組織全体において重要な役割を果たしており、現在 LSO 事務局の中で最も大きな部門となっている。面会したグスマン氏をトップに、コミュニティ、デジタル、音楽家育成、On Track、学校プロジェクトに加えて、合唱プロジェクトと6人のマネージャーを配置し、パートタイマー、インターンを含めて計15名が LSO Discovery に携わっている。

グスマン氏は、大学で音楽(コンサート/ピアノ)を専攻した後、音楽がコミュニティ発展のためにどのように使われているのかといった音楽の文化人類学的な側面を学ぶため、民族音楽学で修士号を取得。最初の仕事は Asian Music Circuit で音楽教育に携わり、学校やコミュニティで異文化間の活動をするべく、アジアの音楽家を英国に招聘したりしていた。

LSO に入ったのは7年前で、もともとは音楽家育成プログラムを担当していたが、2年半ほど前に、LSO

Discovery のヘッドに抜擢された。グスマン氏自身は、音楽家育成プログラムと学校プログラムなど、以前はまったく違った路線で考えられていた教育プログラムをつなぐことに強い関心がある。学校でのプログラムは音楽的バックグラウンドを持たない生徒も含め、生徒のテクニックにはかなり開きがあるため、学校プログラムと音楽家育成プログラムは別物と考えられていた。

しかし実際には、LSO がパートナーなどの協力を得て一緒に取り組むことで、子どもが小さい頃から良質の音楽に触れる機会をつくり、音楽家の道へとつなげていくことが可能になるという。その時に、LSO がロンドン市民にとって代表的存在であってほしい、というのが彼女の願いで、そのためにもコミュニティや市民と長期的な連携を築こうとしている。

② 楽団員の参加形態

LSO の楽団員は基本的にフリーランスで、年間の公演回数の希望などを登録する仕組みになっている。現在は例えば7回のワークショップに参加したらコンサート1回分に換算するなど、徐々にではあるが、演奏会と教育/地域プログラムの「エクステンション」ができるようになっている。今後は、例えば年間10%が教育プログラム、90%がコンサート、という同意を年初に楽団員と結ぶことも可能になるかもしれない。グスマン氏は、楽団員のトレーニングやそれぞれの楽団員に合ったプログラム選択も重要だと言う。

LSO の教育/地域プログラムは、個々のプログラムとその運営が多様化する中で、LSO の楽団員、地域の若者や教師、そして音楽学校の若い音楽家たちが、より連携しながら皆で優れた音楽環境を作るようになっていく。

3. 今後の課題と方向性

英国の音楽教育において今後取り組むべき課題のひとつは、オーケストラがどのように音楽学校に関われるかという点である。音楽学校ではオーケストラに入って演奏する技術を身につけることができるが、例えばLSO がギルドホールと連携して行ったプロジェクトでは、若い音楽学校生はオーケストラと一緒に演奏を行うだ

けではなく、同時に地域の若者向けの活動を経験することになる。

音楽学校の学生に、LSO のプロの楽団員が地元の若者たちと一緒に活動する様子を見てもらうことで、その意義を自然と伝えることができる。そうすることで、オーケストラ楽団員は若い音楽家へ、若い音楽家は地元の若者へと、強いメッセージを伝えることができ、LSO の教育活動は社会にさらなるプラスのサイクルを生み出していく。グスマン氏は LSO の教育/地域プログラムの今後の方向性を、そのように語ってくれた。

2. BBC 交響楽団 | BBC Symphony Orchestra

面会日:2013年 1月29日(火)

BBC 交響楽団

面会者:Paul Hughes (General Manager)

Ellara Wakely (Learning Manager BBC Proms and BBC Symphony Orchestra)

1. オーケストラの概要

BBC 交響楽団(以下、BBCSO)は、1930年の設立以来、英国の音楽シーンで中心的な役割を果たす、英国でも歴史のあるオーケストラのひとつである。最近では、特に20世紀および現代音楽に力を入れており、Jiří Kadeřábek、Jonathan Harvey などを含む作曲家のプレミアに積極的に取り組んできた。

バービカン・センターと提携しているため、シーズン中はバービカンで演奏することが多い。活動の拠点をロンドン、メイダ・ヴェール(Maida Vale)に置き、BBC Radio 3の収録もそこで行われている。収録の中には一般に無料公開されているものもあり、またオーケストラのほとんどの演奏はBBC Radio 3を通して聴くことができる。そのためBBCSOは、英国の中で最も多くの演奏が放送されるオーケストラと言える。教育プログラムにも力を入れており、ファミリー・オーケストラや、学生・学校を取り込んだ先進的なプログラムを実施している。

BBC(英国放送協会)は、BBCSOの他にもBBCコンサートオーケストラ(ロンドン)、BBC フィルハーモニック(マンチェスター)、BBC ウェールズ交響楽団(カーディフ)、BBC スコティッシュ交響楽団(グラスゴー)を含めた5つのオーケストラ(括弧内は本拠地)、さらにBBCシンガーズというコーラスを加えた6つの演奏団体を傘下に抱えている。

BBCSOの事務局の職員数は約22名、BBCSO単体の年間予算やその内訳を特定するのは困難だということであった。

2. 教育/地域プログラム

(1) 教育/地域プログラム実施の経緯と目的

BBCSOでは10年前にラーニング・マネージャー(Learning manager)というポジションを設け、それ以降オーケストラと教育を結びつける活動を活発化させてきた。

BBCのその他の4つのオーケストラにも、それぞれラーニング・マネージャーが置かれているが、当初は、マンチェスターとウェールズの二つのオーケストラにフル

タイムで起用されていた。それを5人に拡大することでさらなる発展を図ろうとしたことが、BBCSOにラーニング・マネージャーが就任した経緯である。BBCという公共放送網を活かせば、ラーニング・マネージャーによって、BBCSOはさらに広く社会に働きかけることができると考えられた。

ロンドンを代表する二つの交響楽団、ロンドン交響楽団とBBCSOはそれぞれ、20年前、10年前に教育プログラムをスタートさせているが、ちょうどその頃から、アーツカウンシルも教育プログラムへの助成を強化するようになった。公的助成の拡大によって目に見える効果を期待できる、ということも、二つのオーケストラが教育プログラムに力を入れるようになった背景のひとつである。

BBCSOの教育プログラムは、家族、学校、生徒、そしてあらゆる世代のアマチュアの音楽家たちなど、社会の様々なグループや世代層を巻き込むことで、オーケストラのプログラムを刷新することを模索している。特にBBCSOのクリエイティブな教育活動のポイントは、聴く者と創る者とを分けずに、自分たちの音楽と一緒に創造することにある。

家族、学校、生徒、そして音楽家などが協働で取り組むプロジェクトでは、次の4つに焦点が当てられている。

- ワークショップなど学校での作業
- 家族と市民の音楽への参加
- 若い才能の育成
- 将来のオーディエンスの育成

トータル・イマージョン(Total Immersion)などユニークなプログラムを含めて、毎シーズン、オーケストラ全体が教育プログラムに参加している。また、オーケストラの仕事とは別に、教育プログラムに興味のある団員には関連するトレーニングの機会を提供している。

(2) 教育/地域プログラムの構成と内容

BBCSOの教育/地域プログラムは、学校向け、家族向けのプログラム、若手演奏家などの人材育成、観客開発などのプログラムで構成されている。それらを横断的に統合させた総合的なプログラムがトータル・イマー



Radio 3の収録も行われる
BBCSOの活動拠点メイダ・ヴェール

ジョンである。

① トータル・イマージョン

BBCSO では、ジャニユアリー・ウィークエンド (January Weekend) という名前で、特定の作曲家やアーティストに焦点を当てたプログラムを20年ほど続けていた。トータル・イマージョンは、そのプログラムが発展して、4～5年前に始まったものである。作曲家などの「人」に加えて、特定の国やコンセプトにも焦点を当てるため、トータル・イマージョンはジャニユアリー・ウィークエンドよりも柔軟性の高いプログラムとなっている。

今シーズンは3つのトータル・イマージョンが企画されているが、例えばイギリスの指揮・作曲家オリヴァー・ナッセンをフィーチャーしたり、日本の音や新しいスカンジナビアの音を探ったりする企画が例として挙げられる。特に最近コミュニティ・ベースの活動を重視するようになっており、トータル・イマージョンにシフトすることによって、そうした取り組みが実施しやすくなった。

以下、トータル・イマージョンのいくつかの具体例を見てみよう。

○ Sounds from Japan

これは日本という国に焦点を当て、日本の音を探る総合的なプログラムである。指揮者の大野和士が武満徹、西村朗、望月京、藤倉大、細川俊夫、三善晃などの作品を取り上げ、最終日には藤倉の Atom、細川の Woven Dreams、武満の November Steps を尺八の三橋貴風、琵琶の首藤久美子らのソリストが、BBCSO と大野の指揮で共演するという企画である。

ランチタイム・コンサートでは Sian Edwards の指揮で、ギルドホールの室内楽アンサンブルが武満、藤倉、近藤譲の曲を演奏し、夕方には Okeanos ensemble による藤倉の Okeanos Cycle の演奏に加え、BBCSO とオケアノスが藤倉とともに、東西の音楽を交えて作曲した新しい曲を披露した。また武満が映画音楽を担当した映画も、会期中に2本上映された。本番当日の前には、ブリティッシュ・カウンシルと共同のクリエイティブ・ワークショップや、Maida Vales Studio でのフリー・コンサートも開かれた。

○ New from the North

北欧の国々の音楽に焦点を当てたプログラム。80歳になる Dane Per Nørgård の作品をフォーカスし、Hans Abrahamsen ほかフィンランドの作曲家 Magnus Lindberg、Jouni Kaipainen、Kaija Saariaho、Sebastian Fagerlund らの曲を探る趣向である。

午前中は、イプセンの劇 Hedda Gabler と Per Nørgård の曲から作られたフィルム (Deborah Warner 監督) のスクリーニングから始まり、バービカンではノルウェーの Vertavo Quartet による演奏、同じく Per Nørgård による音楽を含む2本目のフィルム Timeless Harvest (Martin Verdet 監督) のスクリーニング、夕方はバルティック・ボイスの合唱を堪能できるプログラム、そして夜は再びバービカンですべてイギリス初演となる Sunleif Rasmussen (Prelude for Brass)、Sebastian Fagerlund (Clarinet concerto)、Magnus Lindberg (Era)、Per Nørgård (Symphony No. 8) が演奏される。

○ Oliver Knussen at 60

作曲家、指揮者、指導者である Oliver Knussen に焦点をあてたプログラムもある。吹奏楽のクインテット Three Little Fantasies や Océan de terre を含む1960年代の作品の演奏から始まり、彼の40年にわたるキャリアを、フィルム、演奏を通してカバーしていくというものだった。夕刻には Ophelia's Last Dance や武満の記憶などから構想されたピアノソロ Prayer Bell Sketch など、70年代から90年代をカバー。夜の最後のプログラムは Requiem - Songs for Sue、Symphony No. 3 などナッセンの大作が演奏された。このように半日から1日を通して、作曲家の作品を文字通り年代順に追えるようなプログラム構成となっている。

トータル・イマージョンのその他のプログラムには、ゲストとBBCSO、ギルドホールの学生らで編成したアンサンブルがテーマに沿った作曲・即興演奏を行う「Fusion Ensemble」、BBCSO の本拠地 Maida Vale Studios でブレ・コンサート・ワークショップとコンサートを行う「School concert」、BBCSO のパートナー団体から作曲家や演奏家に参加しワークショップの後にバービカンで演奏を行う「Stream of Sound」、といったものが含まれている。



トータル・イマージョン「Sounds from Japan」の一環としてバービカン・センターロビーのフリースペースで開催された Stream of Sound の様子(上からリハーサル、本番、クレジット)。
武満徹のアイデア「音の流れとしての音楽」を起点に数週間にわたって行われたワークショップによって、参加者と一緒に創作した新しい作品の演奏が披露された。
演奏途中には、2010年に京都のレジデンス・プログラムに参加した Anne Harild の写真(水の流れや緑など)が映写された。

ドン・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン・シンフォニエッタ、ロンドン交響楽団、エイジ・オブ・インライトウンメント管弦楽団、フィルハーモニア管弦楽団、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、サウスバンクセンターなどである。

学生は無料でアプリをダウンロードでき、そのままチケットの予約ができる(チケット代とは別の予約料は不要)。

○ Open Orchestra Initiative

政府の音楽教育の一環であるオープン・オーケストラ・プロジェクトは、すべての子どもたちに音楽のライブコンサートや公演への参加を可能にすることを目的としている。Hammersmith & Fulham, Kensington & Chelsea, Westminster の3つの自治区(borough)から2校ずつ計6校が、トライボロウ(tri-borough)・ミュージック・ハブ、王立音楽大学スパークス(Royal College of Music Sparks)、そして身障者など特殊学級へのサポートや音楽技術の提供を行うドレイク・ミュージック(Drake Music)とともに7ヶ月にわたって活動することで、子どもたちにオーケストラの世界を紹介し、新しい音楽を創作する機会を提供する。

活動中は子どもたちのグループ間の垣根が取り払われ、音楽を一方向的に聴かせるのではなく、子どもたち自身の演奏へとつなげていく。例えば、Flight(飛行、飛躍)というテーマを設定した例では、曲づくりをサポートする音楽技法を駆使しながら、以前は想像でしか存在しなかった世界を実現させていく。これには白鳥が飛び立つ瞬間にインスパイアされたというシベリウス等の曲も参照される。

このプロジェクトは以下のような点で、クリエイティブな要素を備えている。

- クリエイティブな音楽技術の使い方を学ぶこと
- 子どもだけでなく BBCSO 楽団員にも刺激を与えること
- 新しい音楽づくりを通して参加者の創造性を伸ばすこと
- 音楽教師に対しても、音楽技術やワークショップに関する指導を行うことで、プロジェクト終了後も同じ

② スクールプログラム

○ Student Zone

Student Zone は、学生を対象に5ポンドのチケット(予約料は別)で、バービカンでの特定のコンサート、Maide Vale studios でのオープン・リハーサルやレコーディングなど、BBCSO のイベントに気軽に参加できる機会を提供するプログラムである。参加は簡単で、BBCSO にメールで個人情報登録すれば、情報が得られるようになっている。

○ Student Pulse

このプログラムは、スマートフォンのアプリを使って、学生たちにロンドン近郊で行われるコンサートの10ポンド以下のディスカウント・チケットの情報を流すというものである。このサービスに参加しているオーケストラやホールは、BBCSO の他に、バービカン・センター、ロン

ような共同作業の継続を可能にすること

- 学校のコンサートで演奏するための新しい作品を創ること

パートナーのドレイク・ミュージックは、BBCSO 楽団員へのトレーニングとして、サウンド・ビーム、アイ・パッドなどの音楽技術を提供してくれる。またトライ・ボロウ・ハブが学校との仲介役を果たし、王立音楽大学スパークスはトレーニングやワークショップで補助役を務める音楽学生を派遣してくれる。現在はまだ試験的なプロジェクトであるものの、終了後も音楽教師が生徒たちと一緒に音楽活動が続けられるような優れた実例を学校に残せるよう努めている。オーケストラ自身にとっても、身障者の子どもたちと協働作業をするためのトレーニングは、新しいスキルとして他のオーケストラへの応用も可能である。

学校を対象としたプログラムでは、学校でのワークショップを足がかりにして子どもたちにコンサートに来てもらうことで、彼らのコンサート経験を豊かにし、音楽教師に必要なリソースを提供し、さらに子どもたちに創造的なプロジェクトに参加する機会を提供する。そのためには地域内でのパートナーシップが重要な鍵を握っている。ミュージック・ハブから紹介を受けたミュージック・サービスをパートナーに学校でのワークショップを行うことで、オーケストラは学校への出入りが可能となり、またオーケストラにはないような専門知識をパートナーから提供してもらうことが可能である。

③ ファミリー・プログラム

○ Family Music Intro

このプログラムでは、家族向けのワークショップとそれに続くコンサートを5ポンドで経験できるようになっている。夕方6時から始まるワークショップでは、音楽と作曲家に関する解説を聞いたり、持参した楽器を試しに演奏してみたりもできる。そうすることで、音楽をよりよく理解した上でその後のコンサートに臨めるようになる。16歳以下の子どもがいればグループで参加が可能で、ワークショップは7歳以上の子どもと家族が対象となっている。チケットはすべて5ポンドで、ワークショップとメインコンサートへの参加が含まれている。

○ BBCSO Plus Family

これもコンサート前のワークショップとコンサートがセットになった家族向けのプログラムで、5ポンドでクラシック音楽に親しむことができる。コンサートの前に曲目解説を受けたり、楽団員との会話を楽しんだり、あるいはレパートリーについて新たな発見をしたり、楽器に触れて演奏を試したりすることもできるようになっている。

○ Family Orchestra and Chorus Workshop

これはクリエイティブな要素を重視したプログラムで、音楽経験の有無を問わず(プログラムによって7歳もしくは10歳以上の)子どもや大人であれば、誰でも無料で参加し、BBCSO メンバーと一緒に演奏してみることが可能である。このワークショップでは楽譜は使わないのが特徴で、指揮者が曲の短いパートだけを指揮し、続きは参加者が自発的に演奏することで、どんどん音を創り出していく。

1日単位のものから1ヶ月単位のものまであり、最終的にはバービカン・センターでの演奏、長期のものならBBC プロム等での演奏を目指している。楽譜なしで他者の奏でる音を聴き、アニマトゥール(社会・生涯教育において音楽・舞踊・演劇と広いジャンルで一般市民の指導等を務める。ここでは参加者によって創られる様々な音をまとめて一つの音楽へと創り上げていく役割を果たす)の補助も受けながら音楽を創っていくことで、オーケストラ自体が家族のようになっていく。現在では訓練を受けた BBCSO 楽団員がアニマトゥールの役割を果たせるようになっている。16歳以下の子どもは18歳以上の保護者の同伴が必要。参加はオンライン・フォームかメールで申し込む。

家族や市民が参加する場合は、BBCプロム、BBC パフォーミング・グループ、バービカン、BBC Radio3などとパートナーを組み、子どもだけでなく家族ぐるみでBBC オーケストラやコーラスと一緒に、音楽を楽しみ創造する。BBCプロムのInspire SessionというのはBBC パフォーミング・グループとのコラボで行われる、12〜18歳の生徒のための作曲ワークショップで、リズム、ハーモニー、メロディ、音楽形式などへの理解を深め、作曲技術を高められるようになっている。

④ 才能開発・人材育成

○ Come and Play or Sing with the BBCSO and BBC Singers

BBCSOとBBC SingersではRobert Hollingworthの指導のもと、演奏に参加するアマチュアの演奏家と歌手を募集している。リハーサル当日には演奏がBBC Radio3の番組The Choirで放送される。参加する若者たちはBBCSOとBBC Singersのメンバーと一緒に演奏することで、トップ・アーティストの指導を直に受けられる。参加は14歳以上で、16歳以下は保護者の同伴が必要。ブッキング・フォームを提出して参加登録するが、楽器によって人数に制限がある。

教育プログラムの中で最も取りかかりやすいのが才能開発で、音楽専攻の学生や若い音楽家たちがプロのオーケストラと一緒に演奏する経験を通して、音楽家を育成しようというものだ。王立音楽大学、ギルドホール音楽演劇学校(Guildhall School of Music and Drama)をパートナーに、現代音楽に関する様々なプロジェクトを立ち上げているサウンド・アンド・ミュージック(Sound and Music)などもその一例である。この事業の場合、オーケストラとの共演にとどまらず、BBCSOの楽団員からの包括的な指導、BBCSOのための作曲、そしてそれを録音・放送する機会まで与えられる。

例えばギルドホール・オクテット・プロジェクト(Guildhall Octets project)では、ギルドホールの作曲科や器楽の学生に対して、BBCSO楽団員と共に新しい音楽を創り、演奏し、録音する機会が与えられる。ギルドホールの3名の作曲家には、BBCSO楽団員4名とギルドホールの器楽科4名で演奏可能な新曲が毎年委嘱される。この委嘱作品は、トータル・イマージョンや他のBBCSOのプログラムに関連づけられることが多く、曲を仕上げる最終段階ではリハーサルが一般公開される。作品は最後にBBCで録音、BBC Radio 3で放送されるなど、放送局のオーケストラならではのプログラムとなっている。

⑤ 観客の開発・育成

○ Plus Family

これは、8～16歳の子どもを持つ家族向けのワークショップとコンサートである。5ポンドで、気軽にしかもイ

ンタラクティブな形で、オーケストラ音楽のライブ演奏に親しんでもらうことが目的。月1回程度の頻度で企画され、曲はエルガー、ハイドン、プロコフィエフ、ショスタコーヴィッチと様々。ワークショップでは、楽団員やイベント・プレゼンターによって、その夜の演奏曲が紹介される。楽器を持参すれば演奏に参加することも可能。

観客の開発・育成プログラムは、BBCSOやクラシック音楽に親しむ未来の聴衆を育て、拡大させることを目的にしている。特に子どもたちが、小さい頃から沢山の音楽に触れて大人になった時に、それが生活の一部となるよう、今から明日の顧客を開発していこうという狙いがある。ターゲットとなるグループに対してコンサートの割引チケットや補助金を支給したり、観客が演奏曲に親しみやすくなるようコンサート前にワークショップを実施したり、学校や家族向けの特別なプログラムを作成したりすることなども、観客の開発・育成につながるプログラムである。

○ Studio Concert

BBCSOの本拠地Maida Vale Studiosでは、無料の公開レコーディングが定期的に行われている。毎月2回程度の頻度で行われ、曲はドヴォルザークやプロコフィエフのシンフォニー、時期によって復活祭の音楽や現代音楽のマグヌス・リンドベルイなど。

このように、BBCSOではオーケストラ音楽を無料で、または安価で楽しめる様々な機会を提供している。

(3) 教育/地域プログラムの効果と評価

① 教育/地域プログラム自体の効果と評価

プラス・ファミリープログラムではシーズンを通してコンサートに関連した7回のワークショップを実施し、観客動員にプラスの効果が現れている。教育/地域プログラムが、人々の音楽への関心を高め、音楽との繋がりを育てていくという実例のひとつである。

プログラム自体がまだ試験的な段階のため、実質的な成果に関する報告書のようなものはないが、外部からの評価・モニタリングを依頼しており、音楽が人生を充実させ、より豊かにできることが裏付けられるような結果を期待している。BBCの他のオーケストラのラーニング・マネージャーとは情報交換を行い、また英国オー

ケストラ協会 (Association of British Orchestra) ではマーケティング・マネージャーとラーニング・マネージャーが情報共有する機会も設けられている。

評価基準は次の4項目で、それぞれ列記したようなデータや情報を指標にして評価を行う。

- Reach (到達度): 放送回数、ウェブサイト訪問回数 (オンライン)、教育プログラムの情報を見た人々の数 (マーケティング) 等
- Quality (内容): 参加者の参加経験のレーティング (満足度) とフィードバック、パートナーと観客からのフィードバック、新聞やメディアの掲載内容
- Impact (波及効果):
 - ① 量的指標: 他の音楽教育プログラムに参加予定の人数、BBC の別のイベントに参加予定の人数、BBC のプログラムを他の人にも薦める人々の数、教育プログラムに参加して BBC へのイメージが変わった人々の数など
 - ② 質的指標: 参加者やパートナー、スタッフからのフィードバック、具体的な効果に関する情報 (教育プログラムがオーディションやコンクールなどに貢献できたかなど) の収集
- Value for money (対費用効果): 観客や参加者一人あたりの費用を算出

② オーケストラの経営や楽団員に与える効果

このプロジェクトの中核をなす楽団員には、トレーニングへの参加が義務づけられているほか、専門家のガイダンス等も用意されており、5～6年後には専門家のサポートなしでプロジェクトに貢献できるようになることを目指している。そのためには、楽団員が教育プログラムを演奏会に付随する従属的な仕事 (サイドの仕事) としてではなく、プロ活動の一環として認識することが必要である。

実際、今ではアニマトゥールなどの助けがなくても、楽団員がその役目を果たせるようになりつつあり、楽団員の意識の変化や教育プログラムに関わる技術の向上といった成果が既に現れている。また、ギルドホール、ブリティッシュ・カウンシル、バービカン等の外部組織とパートナーシップを組むことによって、社会におけるオーケストラの価値を高めることが可能になっている。

楽団員個人にとってもキャリアを広げる良い機会となっており、音楽家としてどんな社会貢献が可能なのかを認識することにつながっている。さらに、オーケストラ活動の中に常に教育的な要素が加わるようになって、教育に対する見方が変わり、音楽活動のさらなる発展につながることも期待できる。

BBCSO にとって教育/地域プログラムは、今ではオーケストラの中核を担うプログラムとなっている。オーケストラ活動の中に教育的な要素を組み込むことによって、若手音楽家等の人材育成の機会が生まれ、地域社会に広く貢献することも可能である。

(4) 教育/地域プログラムの運営

BBCSO の事務局は22名のスタッフで構成されているが、教育プログラムに直接関与するスタッフは2名 (他にコーラスから1名) と、充実したプログラムと比較すると意外に少ない。教育プログラムに関連する他の職員は、マーケティングの3名、コミュニケーションの1名である。

BBCSO で教育プログラムやワークショップを推進してきた Ellara Wakely さんは、演奏と教育の両方のバックグラウンドを持っていたため、いつか双方をつなげるような仕事がしたいと思っていたところに、BBCSO の Learning Manager という理想的なポジションに出会ったという。

他のオーケストラの事務局や教育プログラムの担当者でも、音楽的バックグラウンドのある人材が初めからそうした仕事に携わるケースは少なくない。英国では、オーケストラ楽団員の OB/OG が事務局に入るのではなく、オーケストラメンバーと事務局がそれぞれの別の専門的な職能として機能しつつあると考えられる。

3. その他

(1) 現在の課題や今後の方向性

ロンドン中心部では、十分な数のオーケストラが活動しているが、中心から離れた地域ではオーケストラやパートナーの体制が十分とは言えないところもある。BBCSO としてそうした遠隔地を訪問することもあるが、パートナーは各地域の地元で活動する組織が基本と

なるため、地域差という課題が生じている。

(2) 現代音楽を重視するオーケストラとして

日本では現代音楽というと、どうしても集客に苦勞するという現状があるのに対し、BBCSO では、プレミアを全面に押し出し、現代音楽への強みを特徴づけようとしている。広いジャンルの音楽や現代音楽の強みを周知させるという発想で、他のオーケストラとの差異を明確にし、自信をもって揺るぎないメッセージを発信し続けることで、顧客を創出していくことが重要。

2012年には計29の新曲を演奏するなど、シーズンを通してプレミアを発表し続けている。プログラミングの際にどのように新曲を組み込んでいくかがポイント。また学校の音楽教師と一緒に仕事をすることで、先生を経由して子どもたちに新しい音楽を普及することができる。子どもには特定の音楽に対する既成概念がないため、その点で、現代音楽を扱うことに対する不安もない。

BBCSO は、今後もこのような現代音楽への強みと独自の放送網を活かした運営を継続する予定である。ただし、もはやオーケストラ単体で運営することは不可能なため、パートナーや資金支援者をはじめとした社会との接点を持ち、関係者と一体になってプロジェクトを進めていく意向である。

3. バーミンガム市交響楽団 | City of Birmingham Symphony Orchestra

面会日:2013年2月1日(金)

面会者:Simon Webb (Director of Orchestral Management), Jacqueline Tyler (Cellist/recipient of the CBSO Long Service Award), Calum Nisbet (Corporate Relations Manager)

1. オーケストラの概要

(1) 沿革

バーミンガム市交響楽団 (City of Birmingham Symphony Orchestra、以下 CBSO) は1920年に創設され、最初のコンサートはエルガーを指揮者に迎えて行われた。その後もエイドリアン・ボルト、サイモン・ラトルなど著名な指揮者を音楽監督に迎え、現在はアンドリス・ネルソンスに率いられている。

CBSO は地元だけではなく、国内外を合わせて毎年約130回にのぼる演奏会を行い、バーミンガムの大使的な役割を果たしている。バーミンガム・シンフォニー・ホールのレジデント・オーケストラとして、CBSO は古典から現代音楽まで幅広いレパートリーをカバーし、金曜日には Friday Night Classics というクラシック音楽が初めての人にも親しみやすい演奏会も開催している。

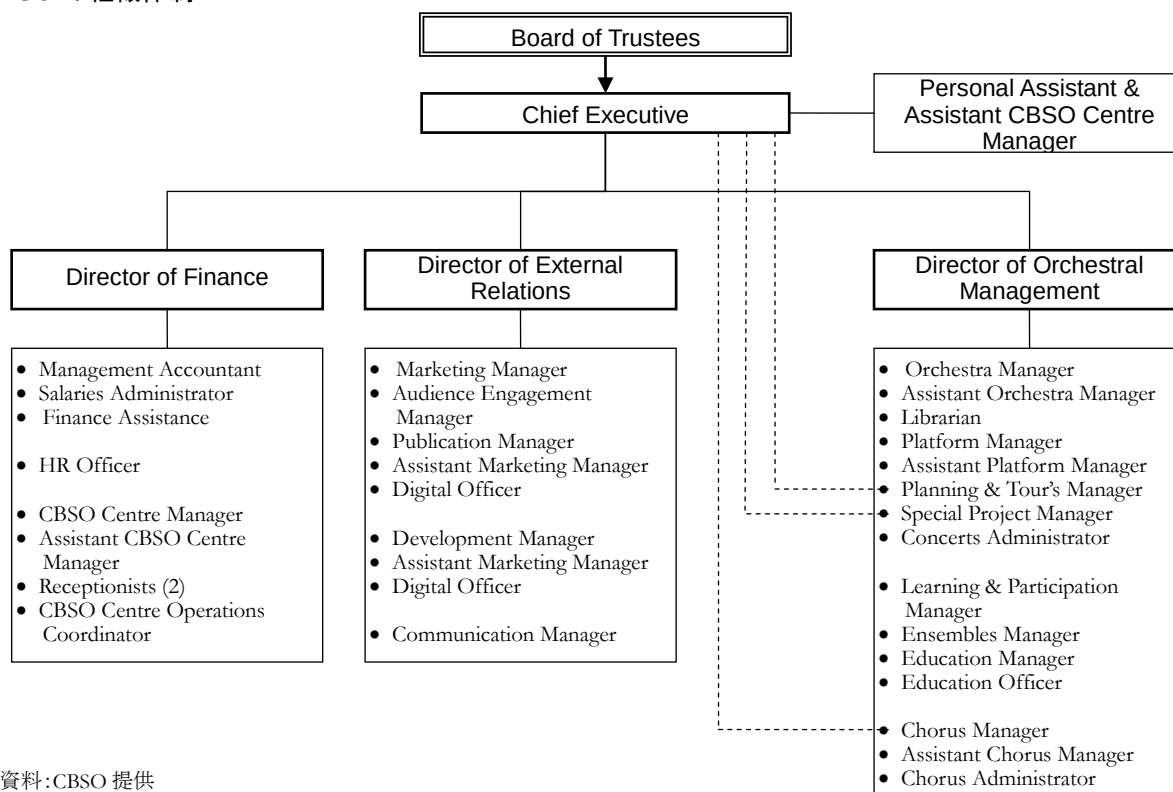
CBSO の教育/地域プログラムである Learning and

Participation (以下 L&P 事業) には、イングランドのウェスト・ミッドランズ州を中心に毎年3万5,000人が参加しており、市内の恵まれない地域の保育園で音楽を紹介したり、才能のある次世代の若い音楽家を育成したりと、活動は多岐にわたる。オーケストラのミッションは「演奏会と教育における卓越性(excellence)」で、コンサートと教育を一体的に捉えて活動している。幅広いレパートリーを揃え、あらゆる人々が参加できるよう複数のアマチュア合唱団を編成するなど、可能な限り多くの人々が音楽に親しむ機会を用意することに戦略的に取り組んでいる。

(2) 運営組織

CBSO の事務局は33名(評議員会を除く)で組織されており、下図のとおり、オーケストラ・マネジメント、マーケティング等を含む渉外(External Relations)、ファイナンスの3部門で構成されている。L&P 事業の担当はコンサートなどと同様、マネジメント部門に属している。

CBSO の組織体制



資料:CBSO 提供



BCSO の演奏活動の拠点
シンフォニーホール

(3) 年間予算と事業収支

CBSO の2011年度の年間予算(支出ベース)は879万ポンド(13億2,000万円相当)。収支の内訳は表のとおりで、民間支援(63万ポンド)と公的な資金援助(360万ポンド)が、収入全体の約50%を占めている。同年度の支出は合計862万ポンドで、17万ポンドの収益が計上されている。

CBSO の運営収支(2011年度) (千ポンド)

収入	
補助金・助成金	4,321
スポンサーシップ・寄付(民間支援)	634
投資収入(受取利息)	13
アーツカウンシル・イングランド助成金	2,168
バーミンガム市補助金	1,450
その他のグラント	56
事業収入	4,468
バーミンガム市および英国内の自主公演	2,259
英国内の公演	558
海外公演	1,060
放送・録音収入	82
教育プログラム(I&P)	87
コーラス	107
CBSO センター	77
雑収入	-
固定資産売却益	1
消費税還付	239
合計	8,790

支出	
資金調達・マーケティング経費	694
公益事業経費	7,795
バーミンガム市および英国内の自主公演	4,807
英国内の公演	866
海外公演	1,510
放送・録音収入	45
教育	260
コーラス	200
CBSO センター	107
その他	1
管理費(上記の事業費以外の管理コスト)	154
年金融資	▲ 18
合計	8,624

資料:CBSO Report and Accounts 2011-12

注: 人件費なども個々の事業経費の中に含まれている。千ポンド以下を四捨五入したため、合計は計算値と一致しない。

(4) シンフォニーホール、CBSO センター

CBSO がレジデント・オーケストラとなっているバーミンガム・シンフォニーホールは国際会議センターに併設され、1991年に開館。メインホールは2,262席で、2001年にはパイプオルガンが設置された。クラシック音楽以外にも、ロックやポップ、フォーク、カントリー、ジャズ、さらにはコメディまで幅広い演目の公演が行われている。運営はパフォーマンス・バーミンガムLtd.で、隣接するタウンホールとともに非営利での運営となっている。

また1998年には、シンフォニーホールの補完的な役割を果たす CBSO センターがオープンした。約300席(可変)のメインホールの他に、リハーサルやパート練習、レッスン、ワークショップ、会議などが行われるスタジオや会議室が併設されている。このセンターはCBSO、並びに兄弟的な組織である Birmingham Contemporary Music Group(1987年に設立され、現代音楽の演奏、作曲委嘱などを行っている)、Ex Chathedra(コーラス団体)の拠点となっており、CBSO の事務局オフィスもこの建物の中にある。

2. オーケストラの戦略計画と教育/地域プログラムの位置づけ

次に、CBSO から提供されたオーケストラ全体の2012～15年の戦略計画(CBSO Strategic Plan 2012-15)と、それを達成するために策定された教育部門を含む2012/13年の戦略計画(Learning & Participation and Chorus Strategic Plan 2012/13 complementing the CBSO Strategic Plan 2012-15)に基づいて、CBSO のミッションや戦略計画と教育/地域プログラムの位置づけを整理しておきたい。

(1) CBSO のミッションと戦略計画

まず、2012～15年の CBSO の戦略計画から、主なポイントを抜粋、要約した。

① ミッション

CBSO は、新作を含む広範囲なレパートリーをカバーし、器楽と合唱のアンサンブルを通して、バーミンガム、ウェスト・ミッドランズ、そして英国の大使として活躍

する世界レベルの交響楽団を目指し、可能な限り幅広い観客のために演奏と教育の両面から卓越した音楽を提供するために存在する。(We exist to offer musical excellence in performance and education, for the widest possible audience, covering a broad repertoire, including new music, via a family of instrumental and choral ensembles, led by a world class symphony orchestra, which act as ambassadors for Birmingham, the West Midlands and the UK)

② CBSO の戦略計画(2012～15年)

1920年に市民リーダーたちによって設立され、これまで様々な業績を残してきた CBSO は、2020年に創立100年を迎える。2012～15年の戦略計画は、CBSO の持続可能な発展に向けて、これまでの業績をより確固たるものとし、より適切な経営資源と運営基盤を確立するための取り組みとして位置づけられている。

前回の戦略計画の施行された2009～12年の間に CBSO は、厳しい景気後退に対処するため、大幅な経営改革に取り組んだ。長年にわたって蓄積されてきた負債を完済して積立金を創設、給与に基づいた年金制度を廃止した。

2009年度には民間支援が大幅に減少し、2011/12年には二つの公的な支援(バーミンガム市、アーツカウンシル)が30万ポンド(4,500万円)削減され、聴衆のチケット購入パターンも大きく変動した。

2012～15年の戦略計画では、そうした課題を乗り越え、CBSO の次の100年に向けて、以下の目標を掲げている。

1. 極めて優れた演奏団体の中心的存在として、世界レベルのオーケストラを維持し、さらなる向上をめざす
2. ライブとヴァーチャルの両面から、広範囲な優れた音楽を素晴らしい環境の中で提供する
3. 新鮮かつ専心的な演奏をもって、より大勢の多様なコミュニティを感動(thrill)させる
4. リスクを負って音楽を学び、可能性を最大限に活かせるような優秀な人材を育成する
5. 若い人々が歌や楽器に取り組むように刺激し

(inspire)、新しい可能性を秘めた世界を切り拓く

6. 学校や地域の中心となって、すべての人々の人生を変えるような音楽の力を擁護する
7. オーケストラのブランド力を活かしたシティ・プロモーションを展開し、バーミンガム市のイメージアップを図る
8. パートナー団体の成功に向け、資源や資質、専門性、アイデアや機会をシェアする
9. 財政的にも組織的にも安定した基盤を整えた上で、それらを刷新し未来に適応していく
10. これまでの伝統や蓄積を讃え、この街を訪れる人々、ここに住み、働き、学ぶ人々を惹き付け、音楽で国際的に有名な都市バーミンガムに誇りを持てるようにする

③ 2012-15年の CBSO の中心的な目標

戦略計画の中では、次に6つの組織的な優先事項(芸術、教育、公益、名声、組織、財政)について、2012～15年の中心的な目標を次のように定め、それぞれの目標達成を評価する指標も設定されている。

○ 芸術的(Artistic)なプライオリティ

1. 音楽監督の影響力を最大限に拡大する
2. 生演奏、教育、オンライン、放送や録音など、活動の幅を広げ、刷新する
3. 後世に遺産を残すため、2020年にオーケストラ創設100周年事業を執り行う

○ 教育的(Educational)なプライオリティ

1. 音楽教育の新たな潮流の中で主導的役割を果たす
2. L&P 事業の規模と範囲を拡大し、芸術プログラムと系統的に連携させる
3. デジタル化など、音楽へアクセスする新しい方法を拡大する
4. 才能を伸ばすためのプログレッション(段階的な発展)の道を提供する

○ 公益的(Public Benefit)なプライオリティ

1. 地元コミュニティと協働する機会を増大させる
2. デジタルを含めた幅広い参加の機会を用意する

3. CBSO センターの利用や活用を増大させ、地元の芸術団体を支援する

○ 名声に関する(Reputational)プライオリティ

1. バーミンガムの代表的な芸術ブランドとしてのステータスを維持する
2. 簡潔なミッション・ステートメントとプライオリティを確立する
3. 組織内外の両面で確かなコミュニケーション・プランを実施する

○ 組織的(Organizational)なプライオリティ

1. 短期・長期のプランニング・サイクルを向上させる
2. 目的に合致したシステムを履行する
3. 変革とチャレンジ(リスク・テイク)を持続できる能力を身につける
4. 人材管理、人材育成への取り組みを強化する
5. ユニオンと協力して労働環境全般の向上を図る

○ 財政的(Financial)なプライオリティ

1. 財政的安定を維持すべく構造的な赤字解消に取り組む
2. 参加の度合いや回数を高めてチケット販売量の拡大を図る
3. より多額のもしくは複数年の寄付や献金を獲得する
4. 適切なパートナーシップを通して洗練された資金調達を行う
5. 確定給付型年金を着実に運営する

(2) L&P 事業とコーラスの戦略計画

前述のどおり、CBSO の事務局は3つの部門で構成されており、教育/地域プログラムは、オーケストラ・マネジメント部門の管轄となっている。この部門は、コンサート関係、L&P 事業、コーラスの3つの業務を管轄しており、先に示した CBSO の2012~15年の戦略計画を達成するための L&P とコーラスの2012/13年の戦略計画が作成されている。

以下にその戦略計画の主要なポイントを抜粋、要約した。

① L&P とコーラスの基本理念(Vision)

すべての人々が音楽と関わりを持つこと、CBSO を誰もがアクセスできるものにし、創造性をかき立て、音楽的卓越を通して変化をもたらすこと、参加への障壁を取り除き、地域間のギャップを解消すること、そしてスキルと人生における機会を向上させること (Musical engagement of quality for all; enabling CBSO to be accessible to all, inspiring creativity, using musical excellence to make a difference; addressing barriers to engagement; bridging gaps between communities; improving skills and life opportunities.)

○ 音楽の卓越性を達成するための手段

参加、創造性、リーダーシップ、演奏、知識と経験の開発、バーミンガムのミュージック・ハブ内外におけるパートナーとの連携

○ 中心となる活動領域

地域における活動、学校との共同作業、才能の育成、人間関係を育み、音楽的経験を豊かにすること、専門的能力を開発する機会の提供、パートナーシップに基づいた活動

② L&P 事業におけるプライオリティ(優先事項)

さらに、L&P 事業における優先事項として、次ページの表に整理し7項目が設定され、それらが、先に記述した10の CBSO 全体の戦略的優先事項、さらには芸術、教育等の6つの優先事項のどの目標に対応しているのかが明示されている。すなわち、CBSO の教育/地域プログラムは、CBSO 全体のミッションや戦略の中に体系的に位置づけられている。

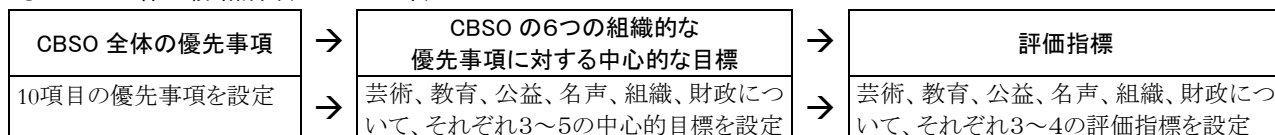
そして、L&P の7つの優先事項ごとに、2012/13年の四半期ごとの具体的な目標が示されている。例えば、後述の Stay Tuned を中心とした学校向けプログラム(優先事項の1)の四半期ごとの目標は、次のように設定されている。

○ 第1四半期(2012年4-6月)

- 2012/13年の学校における活動の計画立案
- 2012/13年の(教育プログラムを実施するための)トレーニングの計画立案

CBSO 全体の戦略計画と L&P の戦略計画の関係

◎CBSO 全体の戦略計画(2012～15年)



◎L&P の戦略プラン(2012年度)

L&P の優先事項	CBSO 全体の 戦略的優先事項	CBSO 全体の 中心的な目標	2012年度の 四半期ごとの目標設置
1. Stay Tuned プログラムを通して質の高い音楽を学校に 届ける(演奏、参加、クリエイティブ・カリキュラム・プロ ジェクトなどを含む)	2,3,4,5,6,7,10	教育-1,2,3,4	→ 2012年度の 四半期ごとの目標設定 (文章中に例示)
2. ファミリー・コンサート、ノートレッツ、センターステージ を実施する	1,2,3,4,5,6	芸術-2 教育-1,2	→ 2012年度の 四半期ごとの目標設定
3. 学校でのコンサートを PBL やミュージック・サービス等 のパートナーと共に促進する	1,2,3,5,6,8,9	芸術-2、教育-1,2 名声-1、財政-2,4	→ 2012年度の 四半期ごとの目標設定
4. ユース・オーケストラ、スパークス、コンセルバトワール スキーム、バーミンガム大での活動を含めた才能育成 プログラムを提供する	1,3,4,5,6,8,10	芸術-1 教育-1,4	→ 2012年度の 四半期ごとの目標設定
5. 学校のためのデジタルコンテンツの作成	2,3,5,6,8,10	芸術-2、教育-1,3 公益-2	→ 2012年度の 四半期ごとの目標
6. 若者のプランニングや意思決定へのインプットを増や す	4,5,6,8,10		→ 2012年度の 四半期ごとの目標
7. 小規模なアンサンブルプログラムを含めて幅広いコミ ュニティプログラムを運営する	1,2,3,5,6,7		→ 2012年度の 四半期ごとの目標

資料:「CBSO Strategic Plan 2012-15」、「Learning & Participation and Chorus Strategic Plan 2012/13 complementing the CBSO Strategic Plan 2012-15」に基づいて作成

○ 第2四半期(2012年7-8月)

- 2012/13年の音楽教育のナショナル・プランの確定
- Stay Tuned プログラムへのバーミンガム市内の申し
込みの最低30校の達成

○ 第3四半期(2012年10-12月)

- ミュージカル・リーダーシップ・プロジェクト(2年目)
のスタート
- 2013-14年の学校プログラムの第一次計画
- 演奏家向け研修の実施

○ 第4四半期(2013年1-3月)

- バーミンガム歴史プロジェクトの実施
- 2013/14年の学校プログラムの確定

- 2013/14年の Stay Tuned の参加校数の増加に向け
た勧誘

3. 教育/地域プログラム

前述のとおり、CBSO の教育プログラムである L&P (Learning and Participation) 事業と、コーラスの戦略計画(Strategic Plan)は、CBSO の包括的な戦略計画に基づいて、その内容をより具体化する形で作成された。L&P とコーラスは、すべての人が音楽と関わりをもつこと、バリアを取り去って音楽を広く人々にアクセスできるようにすることなどを目指している。

コンサートと教育における卓越性を目指すという CBSO 全体のミッションに従って、オーケストラのあらゆる



学校向けコンサートの様子 © CBSO

る活動に教育的要素が含まれている。L&P 事業は、以前は教育 (Learning) と参加 (Participation) の2つの部門に分かれて実施していたが、統合することで事業を効果的に実施できるようになった。

(1) 教育/地域プログラムの構成と内容

具体的なプログラムとしては、①学校向けプログラム、②ニーズに沿ったコミュニティ活動、③若手の才能育成、④観客開発 (ファミリー・プログラムを含む)、⑤プロの音楽家の能力開発 (楽団員のためのトレーニングを含む) に分けられるが、それぞれパートナーとなる機関の協力を得ながら実施している。CBSO はウェスト・ミッドランズの14のミュージック・サービスとパートナーシップを結んでいるほか、プログラムによっては個人 (女優など) の協力を得て、舞台上での動き方、振り付けなどを学ぶこともある。

これら L&P 事業と合唱団の活動は密接に結びついており、CBSO の合唱団は、ユースのための合唱団 (3団体)、大人のための合唱団、地域の聖歌隊の5つに枝分かれしている。

① 学校向けプログラム

学校訪問では、1校につき大抵5、6回訪問し、学校にはさらに音楽教育を発展させるためのスキルやノウ



ハウが残るように心がけている。訪問は楽団員1名のこともあれば、ペアやアンサンブルで行うこともある。

CBSO は年に2、3回、学校の先生と面会する機会を設け、学校側では何を必要としているのかなどを話し合う。時には学校側のアイデアが明確でない場合や、オーケストラが提供できることと、学校が望んでいることにギャップがあることもあるが、共通理解を築きながら一緒に活動できるように心がけている。

○ Stay Tuned

学校向けプログラムの中核である Stay Tuned は、コンサートに加えてインタラクティブなワークショップを提供



学校でのワークショップの様子 © CBSO

するもので、主にTrust Fundとバーミンガム市の支援によって実施されている。最近の企画では、マスクの作製からダンス、歌や演奏を楽しみながら、5つの学校が協同でバーミンガムの歴史に関するコンサートを創っていくというものがある。

Stay Tuned は①Discover(発見)、②Explore(探検)、③Immerse(浸透)という3段階のプログラムに分かれている。CBSO へのイントロとされる Discover は、シンフォニーホールでの学校向けコンサートに加えて、学校でのワークショップもしくは CBSO アンサンブルの演奏会が含まれている。クラシック音楽や楽器への導入となるもので、料金は30人で150ポンド(22,500円相当、一人あたり750円)。

Explore はオーケストラ音楽の世界にさらなる誘いを行おうというもので、シンフォニーホールでの学校向けコンサートに加え、CBSO のシーズン・コンサートへの招待(1公演)、さらに音楽の世界を探究するためにコンサート前か後にワークショップが企画される。オプションとして CBSO アンサンブルの演奏会を学校で実施することも可能。料金は30人で450ポンド(67,500円相当、一人あたり2,250円)。

Immerse はオーダーメイドのプロジェクトで、CBSO の楽団員が子どもたちと一緒に様々な活動を行う。学校向けコンサート、シーズン・コンサート(1公演)、さらに学校での CBSO アンサンブルの演奏会が含まれる。その他に CBSO のリハーサルへの参加、CBSO 楽団員や指揮者との Q&A セッションもあり、料金は1,200ポンド(18万円相当)からとなっている。

ちなみに Stay Tuned では学校側がオーケストラにプログラム費を支払うことになっているが、学校側で料金を支払うことが難しい場合は CBSO が負担することもある。上記の料金は一定の目安で、学校や生徒の経済状況によって、フレキシブルに対応している。

予約は L&P 事業の担当にコンタクトして行う。教師向けに様々な教材がオンラインでダウンロードでき、申し込みでニュースレターの配信を受けられるなど、サポートも充実している。

○ Creative Program

これまでに Stay Tuned の一環として実施された Creative Program の実例を二つ紹介しよう。

ひとつは Breathing the Sky と題されたもので、小学校3校、中学校1校、特殊学校1校が参加して行われた。CBSO のチェリスト、ジャッキー・タイラーがリーダーを務め、CBSO の楽団員のサポート等を受けて、生徒たちは地元の児童作家 Mandy Ross 作のミュージック・ドラマ「Breathing the Sky」を演じた。詩は環境問題を取り扱っており、子どもたちが次世代へ向けて地球環境を考えるための良い手段となった。最後には CBSO センターで親、先生、友達などを招いてパフォーマンスが行われた。

もうひとつは、Midsummer Night's Dream Project。パートナーの REP とともに、90人の子どもを巻き込んだこのプロジェクトは、シェークスピア劇「真夏の夜の夢」から着想を得てミュージカルにしたものである。CBSO の楽団員とボーカリストの指導を受けながら、各学校がそれぞれの歌を作り、Matt Beckingham and Helen Edgar による委嘱曲を学んだ。最後の公演は、意欲と熱意のこもった素晴らしいものとなり、Little Big Time Band の伴奏つきで演じられた。

○ 幼児向けプログラム

幼児向けのプログラムとしては、3～5歳の子どもの家族向けのインタラクティブなミニ・コンサート「Notelets」、保育園や Key Stage 1 の子ども向けの「Numberjack Notelets at CBSO Centre」がある。後者は、テレビやラジオで人気のナンバージャックスの歌と映像を通して、CBSO 楽団員がインタラクティブな演奏を行うというものだ。

また、「Numberjack Notelets」は、CBSO のノートレッツとナンバージャックスのコラボで創られたライブのミュージカル・ショーで、CBSO 楽団員による演奏、ナレーション、ナンバージャックスの歌、ポピュラー音楽、ナンバージャックスの映像などを含めて行われる。パフォーマンス中に、子どもたちがナンバージャックスの助けを受けながら、演奏家の問題を解決していく仕立てになっており、音楽と数学を使ったミュージカルで、子どもたちは数を数えるスキルを高めつつ、テンポなど音楽の重要なコンセプトも学ぶことができる。



幼児向けプログラム Numberjacks(上)とNotelets(下2点) © CBSO



Clock on to Safety の様子 © CBSO

○ 子どもたちの交通安全教室 Clock on to Safety concert

インタビュー当日には Key stage 1-2 の小学生を対象にした Clock on to Safety concert という特別プログラムを視察した。バーミンガム市では子どもたちの道路横断時の交通事故が多発し、大きな課題になっている。その対策に取り組むバーミンガム市の Smart Choices Team が法律事務所の DBS Law の支援を得て、CBSO

とパートナーシップを組み、子どもたちの交通安全教室として実施したのがこのプログラムである。1月30日～2月1日までの間に8回実施され、7～8歳の子どもたち2,400人が参加した。最終的には、夏休みの終了前に市内の55校、3,000人の児童に道路を安全に渡るようメッセージを届けることを目標としている。

DBS Law はもともと CBSO のスポンサーで、子どもたちの交通安全をテーマにしたプログラムで何かいいアイデアはないかと、CBSO に相談したところ、このアイデアに結びついたという。

CBSO センターのメインホールで行われたワークショップでは、セカンドバイオリンの Catherine Arlidge がファシリテーターとして登場。ピアノやバイオリン、チェロ、トロンボーン、ドラムなど10名前後の演奏家たちと、子どもたちの間の床には道路と横断歩道が描かれている。ワークショップ・リーダーの Catherine が左右確認をせず道路を渡ろうとすると、頭の上に車のイラスト付き帽子を被った楽団員たちが、クラクションや自転車ベルの擬音を鳴らしながら道路を通行、危うく事故に遭いそうになる。そうした場面設定がいくつかあり、その度に子どもたちは道路横断時の注意を歌詞にしたオリジナルの歌を歌って Catherine を助ける、という趣向だ。

通常の交通安全教室のように標語として覚えるのではなく、楽しみながら歌を覚えてもらい、実際の道路横断の際に子どもたちの安全を確保しよう、という狙いである。このプログラムの効果に、バーミンガム市の幹部も大いに期待しているという。

地元企業と連携し、子どもの日常生活と密着したメッセージを届けることで、通常の音楽演奏以上に社会に変化をもたらすことができる。CBSO 楽団員がそれぞれ楽器に加えて、自転車のベルなど普段子どもたちが路上で耳にする音を取り入れ、コスチュームなどにも工夫を凝らしながら繰り広げられたインタラクティブなプログラムは極めて興味深いものだった。

○ Music and Ability(障がい者向けプログラム)

このプログラムは、障がいを持つ子どもたちに CBSO の楽団員と一緒に音楽を創り、演奏する機会を与えようというものである。サウンド・ビームなどの技術的サポ

ートを受けながら、CBSO 楽団員があらゆる楽器を用いて障がいをもつ子どもたちの様々なニーズと要求に対応していく。最近のプロジェクトとしては、Maurice Sendak の Where the Wild Things Are に基づいた作品を創作、上演したものがある。6週間で、地域の学校3校、80人以上の生徒が参加して、音楽、アート、アニメーション、ダンスなどを通してテーマを探究した。

The Big Friendly Giant では Roald Dahl の本を題材に、National Institute of Conductive Education (NICE) との3年にわたるパートナーシップを通して、障がいを持つ児童を含む60人の生徒がパフォーマンスを行った。CBSO 楽団員、アニメーター、ビジュアル・アーティスト、ダンサーなどが参加して実施された。

さらに、Journeys to Bharat では、インドをテーマに14～16歳の生徒が楽器とともに、サウンド・ビーム等の技術も駆使して、インドの民話に伴う曲を作曲。CBSO 楽団員、映像作家も参加。最後は観客を招いてパフォーマンス・ショーケースを行った。

② コミュニティ活動

コミュニティ活動では地域の聖歌隊、コミュニティ・オーケストラ、ユース・プロジェクトなどがあり、特に CBSO SO Vocal と呼ばれる聖歌隊は、セリー・オーク (Selly Oak) 地区の人々が歌を楽しみ、リラックスした環境で地域住民と知り合う機会を提供している。さらに地域内の Aston Performing Arts Academy と呼ばれるボランティア組織や芸術団体とパートナーシップを結び、地域の人々がより音楽に参加しやすい環境づくりを目指している。

次の6つのコーラスのうち、最初の3つの Symphonic Chorus ではオーディションが行われているが、その後の3つの Community Chorus にはオーディションがなく、誰でも参加できるようになっている。

○ CBSO Chorus

1973年に設立されたこのコーラスは74年にコンサート・デビューをして以来、CBSO とともに定期的な活動を行っている。合唱指揮は Simon Halsey が25年間務めており、CBSO Chorus はバーミンガムの音楽生活には欠かせない存在となっている。また CBSO と同様、バーミ



CBSO Young Voices © CBSO

ンガムの文化大使的な役割も担っている。

○ CBSO Youth Chorus

CBSO の交響曲の演奏活動では若者の歌声が必要となることが多く、そのコーラスを提供する目的で1994年に創設。9～13歳の少女が参加可能となっており、今では国内でも有数のユース・コーラスとなっている。

○ CBSO Children's Chorus

上記ユース・コーラスと同じ目的で1994年に創設。4～8歳の少年少女が参加可能。果敢なレパートリーに取り組む機会を提供すると同時に、さらなる音楽教育への発展にもつながっている。

○ CBSO Young Voices

バーミンガム・ミュージック・サービスと共同で1999年に設立。7～13歳が対象で、どんな音楽的バックグラウンドを持つ子どもたちにも、レベルの高いコーラスと音楽トレーニングを提供している。移民の多いバーミンガムにあって、バーミンガムの文化的多様性を象徴し、どんなバックグラウンドを持つ人々にも豊富な種類の音楽を紹介するというのが、このコーラスの目的。

○ CBSO SO Vocal

バーミンガム市が実施するアートチャンピオン・スキームの一部として、CBSO が Selly Oak 地区で展開する

地域合唱団。オーディションもなく、18歳以上なら誰でも音楽を楽しむために参加できる。CBSO のシンギング・リーダーによって指導を受けることができる。

○ New Handsworth Community Choir

2013年4月末にスタートする聖歌隊。Handsworth 地区に住む18歳以上の誰もがオーディションなしで参加可能。リラックスした環境の中で音楽を通して地元住民と出会い、親しむ機会を提供する。

③ 若手の才能育成

地域から優秀な音楽家が育ってくれば、オーケストラの未来はより確実なものになるという考え方にに基づき、CBSO は、あらゆる段階の音楽教育の学生たちを支援している。音楽学校や普通校、ミュージック・サービスと密接に連携することで、既に音楽的バックグラウンドのある若者を育成したり、楽器を演奏したことのない子どもに楽器の説明をしたり、音楽を教えたりするなど、幅広い活動に取り組んでいる。

○ CBSO ユース・オーケストラ

1956年にCBSOのジェネラル・マネージャーであった Blyth Major によって創設された Midland Youth Orchestra が、2004年、CBSO Youth Orchestra と合併。その結果、ミッドランズ州内の若者に、プロの指導を含むレベルの高いオーケストラの経験を提供できるように

なった。CBSO の音楽へのパッションをシェアできるようなユース・オーケストラの育成を目指している。

○ Inspirational Ensembles

これは器楽や合唱でオーケストラに参加できるというもので、CBSO Youth Orchestra、CBSO Youth Chorus、CBSO SO Vocal と連動して運営されている。

○ Sparks

ウェスト・ミッドランズ州内のミュージック・サービスの推薦を受けた生徒のためのマスタークラスやワークショップ。同州内の14のミュージック・サービスとパートナーを組んで、毎日違う楽器を取り上げてマスタークラスやワークショップを開催する。一日の最後には家族や友人など観客を招いて演奏。また、シンフォニーホールของホワイエでファミリー・コンサートの観客向けに演奏したり、CBSO のリハーサルや演奏会にも参加できる。

○ Work Experience

このプログラムは、14～25歳までの若者に演奏ではなく、オーケストラ内のマネジメントやマーケティングに携わる経験を L&P 事業の一環として提供しようというものである。リハーサルやコンサートにも参加可能で、CBSO の裏舞台を知ってもらうことを目的としている。地域住民や学校と一緒に活動する方法やコンサート運営の仕事を見たり、理解したりすることで、若者たちが、将来の幅広いキャリアや芸術関連の仕事を考える上で貴重な機会を提供している。

○ CBSO Training Scheme

CBSO はバーミンガム音楽学校 (Birmingham Conservatoire) とパートナーシップを結んでいる。同校の学生は毎年秋に楽団員のワークショップを受け、オーディション通過者には CBSO のリハーサルに年間8回まで参加し、メンターとともに演奏することができるようになっている。そうしたトレーニングに加え、オープン・リハーサルへの参加、CBSO 楽団員による技術指導、コンサートへの招待や割引チケット(5ポンド)など、CBSO は多様な Training Scheme を用意している。若者たちには、エスタブリッシュされたプロから学んで技術を高め、主力オーケストラでリーダーとなるための貴重な機会が提供されている。

④ 観客開発

CBSO では、ファミリー・チケットやファミリー・コンサートなど、家族ぐるみで CBSO の活動に参加しやすくするものから、ワークショップ、デジタル・メディアを駆使した新たな取り組みなど、様々な形で観客の開発に取り組んでいる。

また、イベントなどで CBSO メンバーに演奏を依頼できる CBSO Ensemble、特定のコンサートの前に行われる無料のプレ・コンサート・トーク(約30分)なども、観客開発の一端を担っている。

⑤ 楽団員の能力開発(Professional Development)と教育プログラムへの参加について

プロとしての音楽家の能力開発 (Professional Development) は、楽団員やスタッフに教育プログラムの運営に必要なトレーニングを行い、演奏家としてだけでなく、音楽に関わる多様な活動を担えるプロフェッショナルとしての能力を養成しようというものである。

「インスパイア」という楽団員やスタッフのトレーニングに始まり、「エッセンシャル・トレーニング」と呼ばれる子どもや大人との共同作業のコツを学ぶ一日のワークショップなどがあり、校舎は CBSO の楽団員は受講が必須となっている。他にも、例えば学校プログラムに参加する際に楽団員の即興技術が必要となれば即興のトレーニングを行うこともあるし、さらにヴォーカル・トレーニングやパブリック・スピーキング等、ニーズに応じてトレーニングが提供されるようになっている。

教育プログラムに関して、事務局は一人ひとりの楽団員をそれぞれが適したプログラムに起用するよう心がけている。楽団員の中には学校での活動に積極的に携わる者もいれば、逆にそうした活動が苦手な者もいる。後者の楽団員に対しては、プロの演奏家として若手育成プログラムに熱心に取り組んでもらうなど、それぞれの関心やスキルを見極め、それに適したプログラムに楽団員を送りこむことで、モチベーションの高め質の高いプログラムを実現しようとしている。インタビューに同席し、自らも教育プログラムに熱心に取り組むチェリストの Jackie Tyler 氏の「楽団員が熱心に取り組もうとしない教育プログラムは、プログラム自体に問題が



2013年末に開館予定の図書館
バーミンガムの新しいアイコンとなることが期待されている。

ある」という発言がそのことを象徴している。

また事務局が一方的に決めたことをやってもらうのではなく、楽団員と話し合いや意見交換の場を設け、ボード・ミーティングに招くなどして、楽団員自らが率先して教育プログラムに取り組むような形で進めている。CBSO では、サイモン・ラトルの多大な理解とサポートのもと30年ほど前から教育プログラムを実施するようになったが、その時から基本的に楽団員主導のプログラムとなっている。オーケストラの空きポジションへの雇用に関しても、音楽家としての卓越した能力の他に、その候補者が(学校や地域での活動などに)何をプラスできるのかということが重視されている。

バーミンガムでは2013年末に新しい図書館が開館予定で、そこではデジタル資料などが充実し、多くの人が情報にアクセスできるようになる。CBSO では既に、図書館での教育プログラムも検討中で、ファミリー・コンサート、ユース・コンサート、ワークショップ、文学のリーディングと音楽と組み合わせたプログラムを実施する予定である。具体的にはバーミンガム市の支援を受け、図書館ともパートナーシップを結び、図書館で作家によるワークショップ、音楽演奏、物語の創作などを含む1週間ほどのワークショップを企画している。

(2) 教育/地域プログラムの効果と評価

① 教育/地域プログラム自体の効果と評価

プログラムの評価は質的評価、量的評価の両面から行われている。

質的な評価は、アンケート、先生からのコメント、それから教育的なプライオリティ(例えば子どもの安全教室「Clock on to safety」なら、子どもが道路の渡り方を学んだか、道路横断での事故が減少したかなど)でも行っている。すべてのプログラムに対して内部・外部の両方からの戦略的な評価を実施している。

バーミンガム市やアーツカウンシル等の資金提供者に関しては Key Performance Indicator(重要業績評価指標)という評価指標が用いられる。

例えば、バーミンガム市の評価項目には、地域からのイベントへの参加人数、観客数、アワードなど賞の数、地域外活動では、地域外参加者の数、アーティスト参

加人数、パフォーマンス数、メディアでの放送や出版などが含まれている。アーツカウンシル・イングランドの評価項目は、国内メディアによる4つ星または5つ星レビューの獲得数、チケット販売数、CD や放送などメディア出版回数等が含まれている。

プログラムによっては、楽団員の個人的な感想なども反映させるケースがある。

② オーケストラの経営や楽団員に与える効果

このインタビューには楽団員のチェリスト Jackie Tyler さんも身障者の学校活動から帰ってきたところで参加してくれた。彼女は子どもと接することで、彼らの繊細な反応を受け取り、音楽がいかに優れたコミュニケーションツールであるかを理解でき、楽団員としても日常とは異なる音楽の深みを学ぶことができるという。彼女は、学校プログラムでも先生のためのリソース・パック(一例としてエルガーの楽曲の情報とリスニング・ガイドラインをまとめたもの)も個人的に作成している。こうした楽団員の自主的な活動は、教育プログラムに貢献すると同時に、楽団員個人の専門的な技能(skill set)を高める結果にもなるだろう。

CBSO の音楽プログラムはとにかく、楽団員が先に舵をとってプログラムをすすめる、事務局は後から支援するという姿勢が既に根付いているようである。

(3) 教育/地域プログラムの運営と予算

L&P 事業はマネージャーを含めて5名ほどのスタッフで運営される。インタビューイヤーの Simon Webb がディレクターを務めるマネジメント部門の一部が、教育プログラムの担当チームとなっている。

CBSO の L&P 事業で重要な役割を果たしているのが、パートナー団体である。学校、大学、音楽学校、地方自治体、そしてホールなどとパートナーシップを結ぶことで、才能育成などの面でもオーケストラの未来をより確実にすることができるし、CBSO に不足しているスキルを外部組織から学ぶことができる。イギリスの幼児向け番組 Teletubbies で Laa-Laa 役を務める女優から演技指導を受けるなど、教育プログラムは個人・団体あらゆるレベルでパートナーを組んで進められている。

前述の年間収支によれば、教育プログラムの年間経



CBSO のオフィスの様子
スタッフが Clock on to Safety で使用した車の帽子をかぶっている。

費は26万ポンド(3,900万円相当)、収入は8万7,000ポンド(1,300万円相当)である。ちなみに教育プログラムは、ファンドレイジングにとっても有効な事業で、Clock on to Safety プロジェクトでは、1万ポンド(150万円相当)の資金調達に成功した。ドイツ銀行は学校プログラム全体のスポンサーとなっている。

4 その他、日本への提案など

Calum Nisbet 氏 (Corporate Relations Manager) は企業関連の側面から話をしてくれたが、企業から資金を受け取るだけでなく、何を支援者に返せるかということがポイントだという。CBSO のメインの支援者は銀行(バークレーとドイツ銀行)だが、ドイツ銀行の雇用者は30代の人々が多いため、教育プログラムに興味を示している。リーフレットなどにサポーター・タグを入れることも忘れない。前述の子どもが交通安全教室のプログラム Clock on to safety には、DBS Law という法律事務所が助成をしている。ビジネスを教育とホスピタリティでつなげる意識があるようだ。

さらにチェリスト Tyler さんの話だが、音楽を演奏したことがないような子どもたちも音楽を作曲・演奏したり、ダンス、言葉、演劇などを含めたユニークなパフォーマンスを創ったりすることで、子どもはヒューマン・スキルを高め、チームづくりや他者の話を聴くことを学ぶ。さらに子どもたちに達成感を与え、自分の価値(セルフ・ワース)を認識する自己肯定感を得ることもできるという。

Webb 氏による日本のオーケストラへの提案は、まず外部から始めるのではなく、内部で何ができるのかを模索すること、各オーケストラの強みから始めてそれを育成していくことである。バッハなどの偉大な音楽家はすべてコミュニティに根ざし、コミュニティから始めたことを考えると、コミュニティを築きコミュニティに携わることの意義が伝わってくるという。

Webb 氏は元チェリストで、CBSO で仕事を始める前は演奏家としてロンドンで活躍していた。インタビューの日は急遽彼も久しぶりに演奏に参加することになり多忙な時にインタビューをお願いすることになったが、彼は演奏家であり続けることもまた、事務局のマネジメント部門に必要なクリエイティビティをもたらすという。

CBSO は演奏活動をするオーケストラとしてだけではなく、文化教育活動の推進機関としてもバーミンガム市にはなくてはならない存在となっている。この「できることから始める、オーケストラの強みを伸ばす」という姿勢は、ロンドンや東京など都市部に集中するオーケストラ以外にも、特に地方のオーケストラには良い参考例となるのではないだろうか。

4. アーツカウンシル・イングランド | Arts Council England

面会日:2013年1月29日(火)10:00~11:45

面会者:Adam Jeanes (Relationship Manager – Music)

1. ミュージック・ハブ(Music Hubs)創設の背景、経緯と目的

英国では、ほぼすべての地方自治体(local authorities)にミュージック・サービス(Music service)と呼ばれる組織があり、学校の通常の音楽カリキュラムに加えて、楽器演奏などの専門的な音楽教育を提供していた。主に小学校など学校に音楽の専門家がいなかった場合には、地方自治体が音楽家を学校に派遣しており、それがミュージック・サービスの基本的な役割だった。しかし、自治体(borough)とミュージック・サービスが特に細分化したロンドンでは、このシステムの政治的側面に対する批判が高まっていた。

2012年3月 Ofsted(The Office for Standards in Education, Children's Services and Skills、子どものケアや教育の質的向上を目指した規制や調査を行う外部組織)が出版した学校の音楽教育に関する調査では、対象となった音楽教育活動の3分の2に改善の余地があると報告された(2008-11年)。特にこのレポートでは、音楽教育の質に学校差や地域差があること、特別教育が必要な子どもたちやフリー・スクール・ミール(政府負担による食事)へ申請可能な子どもたちの中には、付加的、専門的な音楽教育に十分に参加できていない子どもたちがいることが問題視された。そのためこのレポートでは7つの取り組み課題が設定され、子ども間・学校間での音楽教育の不平等をなくすこと、子どもの音楽能力の段階的な発展を促すような計画を立案することなどに焦点が当てられている。

2010年、デーヴィット・キャメロンを首相とする保守・自民連立への政権交替によって、政府の側からも音楽教育に修正が加えられることになる。2011年に文化・メディア・スポーツ省(Department for Culture, Media and Sport)と教育省(Department for Education)がダレン・ヘンリー(Darren Henley, Managing Director, Classic FM)に芸術教育に関するレビューを依頼。その結果作成されたヘンリー・レビューと呼ばれるレポートでは、地方自治体を経由した古いシステムの音楽教育を改訂し、あらゆる組織が連携して音楽教育を提供すること、学校教育のカリキュラムとそれ以外のものを含む5歳から

18歳までの音楽教育の責任を担う「ハブ」を各自治体(borough)に設けることが提案された。

ヘンリー・レビューに基づき、2011年11月に音楽教育のナショナル・プラン(The Importance of Music: A National Plan for Music Education)が文化・メディア・スポーツ省と教育省によって発表された。このプランにより、ミュージック・サービスと地方自治体を中心となった音楽教育から、アーツカウンシルが音楽教育およびハブの運営全体をいわば統括する仕組みにシフトすることになった。

ハブになるための申請は2011年11月にアーツカウンシルによって発表され、2012年2月の締め切りまでに、150団体から申請が提出された。仕組みの大幅な変更にも関わらず申請期間はたった3ヶ月と限られていたため、申請の準備ができていたミュージック・サービスは限られていたのが現状のようだ。2012年3月までに選考が行われ、4月に結果発表。採択されたハブには2012年9月までの間にアーツカウンシルによってさらなる提案や示唆が加えられた。

5~18歳の生徒を対象にナショナル・プランを実施するにあたって、ミュージック・ハブの4つの基本的な役割(コア・ロール)は①子どもが楽器演奏をクラス全体のティーチング(whole-class ensemble teaching)を通して学ぶ機会を設けること、②早期段階からアンサンブルによる演奏機会を設けること、③プログレッションー才能のある児童がアンサンブルに参加し、その後のキャリアを展開できるようにすること、④シンギング・ストラテジー定期的に歌う機会をつくり、他の楽器演奏のスキル向上の機会も地域で得られるようにすることである。

ハブに選択が委ねられるさらなる3つの役割は、①チューターなど音楽教育従事者へのプロフェッショナル・トレーニング(continuing professional development-CPD と呼ばれるクラス)を提供すること、②楽器を割引もしくは低所得者には無料で貸し出しすること、③オーケストラの演奏を聴いたり、プロの演奏家と活動したりするなど、大規模もしくはハイレベルな音楽に触れる啓発機会を子どもたちに提供することである。

2. アーツカウンシルの役割と予算規模

上記のナショナル・プランが発表された際、教育省はアーツカウンシルにファンド・ホルダーとしてこのプランの資金運用を任せることになった。以後アーツカウンシルは2012～15年までの3年分の音楽教育の予算を教育省から受け取り、ハブの申請・選考プロセス、音楽教育に関する助成金の運用、およびパートナーシップの発展など、様々な役割を担っている。音楽組織・団体への投資総額は英国全土で約2億1,300万ポンド(320億円相当)で、そのうち音楽教育へは2億200万ポンドが投じられる。そこからハブに対して、12年度は7,500万ポンド、13年度は6,300万ポンド、14年度は4,800万ポンド、計1億9,600万ポンドが割り当てられる。

アーツカウンシルは政府で定められた教育カリキュラムへの助成をすることはできない(エクストラ・カリキュラム活動への助成は可能)ため、以前はアーツカウンシルとミュージック・サービスの連携は見られなかった。しかし現在では、上記の他にもアーツカウンシルはハブの活動状況をモニターし教育省にレポートする役割を果たすため、常にミュージック・サービス組織とコミュニケーションをとるようになった。

教育省の資金は音楽教育を供給し、ミュージック・ハブを発展させることを目的としているため、アーツカウンシルにはハブを発展させる責任があると同時に、リスク管理も任されている。アーツカウンシルは学校や音楽組織の橋渡しの役割を担い、音楽教育に関する連携を監督し、さらなる協同の機会を提供している。

予算はその区域の児童数に基づいて割り当てられる仕組みとなっている。出生率と移民の増加で児童数が増える中、政府の予算削減によって30～50%予算をカットされた団体もあり、予算が増加した団体は少ない。ナショナル・プランでは特に、2015年までの間に今まで続いていた助成金の地域格差を是正することを目指している。教育省からの助成金は主にハブの4つのコア・ロールの実施に費やされ、アーツカウンシルは2012年8月から毎年3回に分けてハブへの助成金を分配することになっている。

3. ミュージック・ハブの現状

イングランドには現在123のハブ(ロンドンには29のハブと42のナショナル・ポートフォリオ組織、National Portfolio Organizations)が存在するが、そのうち現状として90%は以前のミュージック・サービスによって運営されている。ミュージック・サービスは音楽教育の先生(チューター)のためのエージェンシーである。イングランドの学校にはstate-maintained school/ academy/ free school など3種類の学校が存在するが、国が設定したカリキュラムを実施する音楽教師がいない場合、学校がミュージック・サービスに連絡し、音楽専門家の派遣を要請する。

今回のナショナル・プランで重要なポイントは、子どもたちがグループで同じ楽器と一緒に演奏すること(WCET- whole class ensemble tuition/teaching と呼ばれる)で、それはミュージック・サービスから派遣された音楽チューターによってまとめられる。チューターがこの共同学習を効果的に行うために何らかの援助が必要となる場合は、ミュージック・サービスから他の人材が招へいされる。学校は必ずしもミュージック・サービスに委託する必要はなく自主的に選択ができるが、フリー・マーケット化したこの音楽教育市場は整理されておらず、ここでミュージック・ハブが必要となる。

このプランの良い点は、ミュージック・ハブは何を提供できるのか、何が求められているのかを子ども、親、学校などに聞きとりをする、つまりニーズの分析から始まることである。ただし、未だに古いシステムも存在しているため、アーツカウンシルはミュージック・サービス、ハブ、そして地域団体と連携を取りながらこのプランを進めている。

ナショナル・プランによると、すべてのミュージック・ハブの基準になるようなモデルはなく、地域の状況やニーズによって柔軟に対応することになっている。しかし、ハブは基本的に、ナショナル・ポートフォリオ組織など特定の助成を受けている音楽団体、地域の音楽団体や合唱団、地域や国の芸術団体、ボランティア活動団体、地域のビジネスセクター、そして学校などと連携することが求められている。

特に学校に関しては、地域内のすべての学校と連絡を取り、生徒へサービスを提供し、音楽教育の重要性を学校の指導者に提言するなどの役割も担わなければならない。またこのような音楽教育活動を通して、各都市や地域、各学校ならではのアイデンティティを高めることも求められている。ミュージック・ハブの活動を通して、学校や地域コミュニティに達成感をもたらし、子どもたちの音楽に対する熱意を向上させるなど、ハブは市民のプライド(civic pride)を高めるために地元のパートナーと協同して作業に取り組む。

パートナーシップを結ぶことはファンドレイズの面でも重要となる。アーツカウンシルから既にまとまった助成金を得ているナショナル・ポートフォリオ組織も、ハブと協同するために他の助成金に申請することが可能となっている。ハブの予算はカリキュラムを教えるという一つ目のコア・ロールへ主に使われるため、他の活動においては、ミュージック・サービスはハブに連絡を取り、特定の組織や学校と連携する道を模索できる。

このようにハブは各地域における音楽教育の中核としての役割を果たしている。

4. ミュージック・ハブの評価、モニタリング方法

このシステムの初年度上半期の報告は2013年4月に予定されているため、公の調査や評価はまだ実施されていない。しかしすでに、団体間に新たな連携関係が構築されたり、世界各地の音楽を奏でる機会が提供されたりするなど、多様な音楽教育が生まれている。このシステムは、2015年3月までの3年間のプログラムだが、2015年5月に選挙が予定されていることを考えると、もう少し長い期間プログラムを続けて結果を見ることが必要だと思われる。

また、ミュージック・サービスと地方自治体が中心となる古いシステムも未だに存在しているため、新旧のシステムの比較も必要である。とはいえ、以前は必須ではなかった他団体との連携を通じた音楽教育が、今では必須となっているため、ハブが数多くの団体や学校との間のつなぎ役になることで、さらなる連携作業や新しいパートナーシップの構築などが期待される。

アーツカウンシルはハブをモニタリングする役割もあ

るため、実際の音楽教育の実施状況や質、すべての子どもに対する音楽教育の公平性、助成金の運用方法の適正さなどを監督する。アーツカウンシルによるハブのモニタリングは、継続して毎年3回行われることがナショナル・プランによって定められている。またモニタリングのプロセスではアーツカウンシルとの協議を通して、ハブの責任者は新しいパートナーが参入しやすいように柔軟に対応することが求められる。そうすることで、ハブのパートナーシップを国や地域の変化に合わせてながら発展させていくことができる。

ハブの申請時に掲げられた戦略が、経済格差、音楽的才能の有無、特別教育の必要性や人種・ジェンダーを越えて、実際に子どもたちにどのような政策を満たすかたちで実施されたかということが、アーツカウンシルによるモニタリングの際に重要なポイントとなる。モニタリングの後、ハブは音楽教育活動のパフォーマンスについてアーツカウンシルからフィードバックを受け取ることになっている。モニタリングの結果、助成金が計画されたとおり適切に使われていないと判断された場合、アーツカウンシルには助成を差し控える権利もある。

また、教育省と文化・メディア・スポーツ省との連携で生み出されたこのナショナル・プランをモニタリングするために、アーツカウンシルとは別に、ナショナル・プラン・モニタリング・ボードという委員会も組織されている。その委員会によって、教育方針の改正が正しく実施されているか、政府側からもモニタリングが行われる予定だ。

5. 課題と今後の方向性

子どもたちがこのプランによって、彼らの満足する音楽教育を受けられるかどうかは、先生の質による部分も少なくない。また西ロンドンなどのように一つのハブに有名音楽団体が名を連ねるような区域もあれば、地方では遠くまで足をのばさないと音楽の機会に恵まれないう区域もあり、教育の質のレベルを保つことと地域格差を是正することは未だに解決すべき課題となっているようだ。

しかし音楽教育のナショナル・プランの文書が、「音

楽は人格形成を促す力を秘めており、だからこそ若者の教育に導入されるべきだ」というアリストテレスの引用から始まるように、このプランは音楽演奏技能の向上に留まらず、子どもたちが他者とコミュニケーションをとるための手段として、音楽への意識をできる限り平等に高めるという側面を持っている。そのため、このプランでは音楽分野のみに限らず、法務、協会、青年団体、保健機構等、社会の様々なところに必然的に関わりが生まれるようになっており、そうすることで地域ならではの特質を活かし、シビック・プライドといわれる市民としての意識や誇りを高めることにつながる。

経済格差や特別教育を必要とする子どもへの配慮を含めた音楽教育プログラムは、ロンドンを中心に英国各地に見られる。特に地域格差の是正という面では、文化芸術が東京に一局集中している日本においても、示唆を与えるところがあると考えられる。